

アーサー王宮廷のビザンツ騎士

——クレチアン・ド・トロワ『クリジェス』雑考——

根津 由喜夫

I はじめに

伝説のブリタニアの英雄アーサー王がオックスフォードで開催した馬上槍試合に、正体を隠した一人の騎士が現れた。

彼は連日のトーナメントで「湖の騎士」ランスロ、「聖杯の騎士」ペレスヴァルなど名高い円卓の騎士を打ち破り、王の甥ゴーヴァンとは互角の戦いを展開して、大いにその武名を称えられたのである。

この騎士の名はクリジェス。彼の母は前述のゴーヴァンの姉妹だったから、彼にとってアーサー王は大叔父にあたる。

注目すべきは彼の父方の血筋である。彼の父アレクサンドルはコンスタンティノープルとギリシアを支配する同名の皇帝アレクサンドルの長子であり、それゆえクリジェスは皇帝家の正嫡として将来、帝位に就くことが約束された青年だったのである。

もちろん、ここまで話してきたのは文学上の虚構の世界の出来事である。

それは、「フランス最初の偉大な物語作家」クレチアン・ド・トロワの主要な5つのロマンス作品のうち2番目に位置する『クリジェス』の筋書きなのであった。¹

いわゆる「ブルターニュもの」と総称されるアーサー王宮廷をめぐる物語にコンスタンティノープルの皇帝家出身の若者が主人公として登場しているだけでも充分、驚くべきことだが、『クリジェス』には他のクレチアンのロマンスとは異なる趣向が凝らされていたことも併せて注目しておかなければならない。すなわち、そこで作者が描き出しているのは、他の作品に漂う幻想的なケルトの異境のイメージではなく、現実の時間的、空間的な広がりをもった極めてリアリスティックな世界なのである。

そうした特徴を端的に示しているのが、『クリジェス』の中に次々と登場する具体的な地名である。

たとえば、コンスタンティノープルを船出したアレクサンドルは、ブリテン島南岸のサウザンプトン(Sozphantone)に上陸し、当時、アーサー王が宮廷を構えていたウィンチェスター(Guincestre)に赴いている(vv. 272-300)。

また、ブルターニュに滞在中のアーサー王の許にブリテンの謀反の知らせが届いたのは、ロンドン(Londres)、カンタベリー(Quantorbire)を經由してドーヴァー海峡を渡ったことであった(vv. 1052-1056)。

さらに物語の終盤でアーサー王がイングランド、フランドル、ノルマンディー、[イル・ド・]

フランス、ブルターニュ、そしてスペインの隘路に至るまでの全土から大軍を集結させる場面など(vv. 6684-6689)、ドーヴァー海峡を挟んで英仏にまたがる広大な版図を誇ったヘンリー2世治下のアンジュー帝国を想起させている。²

こうした極めて具体的な地理的情報に加え、物語の中心を成すドイツとコンスタンティノープル両皇帝家の政略結婚を巡る物語も、後述するように多くの研究者たちの関心を集め、同時代のヨーロッパ国際政治の中にそのモデルを探し出そうという試みが19世紀以来、繰り返されることになったのである。³

しかし、こうした史実の中に文学作品のモデルを探そうとした試みは、一時は大きな盛り上がりを見せたものの、1960年代にさしかかる頃にはすっかり下火になってしまったようである。

それは、何よりも、多くの仮説が提示されたものの、そのいずれもが決め手に欠け、議論が収斂してゆかなかったことが大きな要因だったと思われる。後に紹介するように、これらの議論の多くは、物語の筋の一部と似かよった史実を探し出してそれが作品のモデルだと主張する一方で、細部で両者が一致しない箇所については作者の創作上の意図に基づいて改変が施されたのだ、と語って済ますなど、多分にご都合主義的な論法が目立ち、そうした手法が、こうした研究の限界と認識されたのは間違いないものと思われる。

かくして、クレチアン・ド・トロワ研究の主たる潮流は、今日では、こうした作品の成立背景を探る試みから、テキスト自体の内容分析や、そこに隠された象徴的な意味を読解することを目指した研究へと移っているようである。⁴

だが、一見、見捨てられて久しい廢鉱のように見える、こうした研究領域も、歴史研究者の目から見れば、まだ魅力的な鉱脈が隠されている可能性があるように思われる。また、この半世紀ほどの歴史学の進歩から得られた成果を踏まえて、この主題に取り組んだならば、50年前には気付かれなかった新たな知見を得ることも期待されるだろう。

そのための準備作業として、以下ではこれまでに提示されてきた学説を整理し、先人たちが『クリジェス』のモデルとして想定した史実を列挙してみることにしよう。なお、あらかじめ断っておくが、現時点において、過去の学説の中からひとつを作品の真のモデルとして選定することは、筆者の能力を超えており、本稿の目的とするものではない。ただ、これら一連の研究を渉獵する中で、この時期、西欧、とりわけフランスの王侯たちとビザンツ宮廷との間に思いのほか活発な交流があったことが確認されるのは興味深いことである。

こうした視角に着目すれば、いささか行き詰まりを示している従来の同時代史に文学作品のモデルを探す即物的な手法に代わって、歴史学研究者がこの作品にアプローチすべき別の手法が浮かび上がってくるのではないだろうか。

この点で参考になるのが、フランス中世社会史の大家ジョルジュ・デュビーが、宮廷風恋愛を扱った文学作品とフランス貴族社会との関係に触れた次のような発言である。

「この文学の主人公たちや女主人公たちに付与された仕草と感情は、詩人たちが喜ばせよう、と腐心した男や女の行動と無関係ではなかった。なぜならこれらの歌曲、これらの物語は気

に入られたのであり、さもなければ彼らの言葉は決してわれわれにまで伝わらなかったであろう。それらが気に入られたのであるから、現実の一面を反映していたこと、それらの中に登場した人物たちが幻想とはいえそれほど奇異でもなく、かけ離れ過ぎてもおらず、彼らの愛の進展を情熱をこめてたどる騎士や貴婦人が登場人物に自分自身の態度のいくつかを認め、夢想の中で、彼らと自分とを一体化することが可能であった。ランスロ、グニエーヴルが身近に思えた。模倣できない相手ではなかった。現に彼らは模倣され、人は彼らを模倣するのを楽しんだ。聖者伝のように、気晴らしの文学はモデルを提示した。これらの手本は、度合いの違いはあれ追随者を生み、そのような模倣の結果、社会の現実フィクションにいつそう密接に近づいた。」⁵

この発言のひそみに倣えば、クレチアン・ド・トロワの『クリジェス』に登場するビザンツ出身の騎士たちは、12世紀フランスの貴族たちの想念の中に結ばれた理想のビザンツ人の姿だったのではないだろうか。

12世紀、西欧人のビザンツ観は、南イタリアのノルマン人とビザンツとの相次ぐ戦争やそれに伴う後者の反ビザンツ・キャンペーン⁶、さらに十字軍行軍中のトラブル⁷などの影響で次第に悪化していったように考えられている。

そうしたなかでコンスタンティノーブルの皇子が、物語の主人公として一見したところでは極めて好意的に描かれていることは、非常に注目すべき事象だと言うことができるだろう。

そこで本稿では、先行研究に見られる史実と文学の照合作業に加えて、『クリジェス』自体のテクストに分け入り、そこから読み取れるフランス上層貴族層の心象世界の中のビザンツ人のイメージを復元する作業にもあわせて取り組みたいと考えている。こうした作業を通じて、我々は、12世紀後半、フランスの高位貴族たちの想念の中にあつた「ありうべきビザンツ人」の姿を具体的に描き出すことができるのではないだろうか。

II 作者と物語

具体的な考察に入る前に、今回、取り上げる『クリジェス』をめぐる基本的な情報を整理しておこう。

まず、作者であるクレチアン・ド・トロワについて。⁸

彼は「中世最大の作家であり、騎士道物語の真の創設者であつた」と称えられている⁹が、その生涯について知られていることは驚くほど少ない。「クレチアン・ド・トロワ」という完全な形の名称で彼が登場しているのも、彼のアーサー王ものの最初の作品『エレックとエニード』の冒頭部（第9行）の一度きりにすぎない。

ジャン・フラピエによれば、彼は、その文章に残された痕跡から、シャンパーニュ地方出身であつたことは間違いないものの、同地方の中心都市トロワの生まれであるかは確証できず、そこに一時的に滞在していただけの可能性も残されているという。¹⁰

「クレチアン」という名前を手がかりに、同時代の史料に登場する同名の人物と彼を同定しよ

うとする試み¹¹ や、彼を改宗ユダヤ人に比定する説¹² などが出されているがいずれも決め手に欠けている。天沢退二郎氏が、ロジェ・ドラゴネッティの説として、彼の筆名は「トロイ（＝異教世界）のキリスト教徒」を意味する、という解釈¹³ を紹介しているが、この仮説が受け入れられるとすれば、彼の正体はますます深い霧に包まれてゆくように感じられる。

現時点で彼のキャリアとしてほぼ確実なことと言えることは、彼がトロワないしその周辺の聖堂附属学校で学業を積み、いわゆる三学（文法、修辞学、弁証法）に加え、おそらく四科（算術、幾何、天文学、音楽）を習得していたこと、そしてラテン語に通じ、古典作品に親しんでいたことが初期のオヴィディウスの翻案物から裏付けられること、くらいである。

文筆家としての彼の活動時期に関して手がかりになるのは、『荷車の騎士』の中に記されたシャンパーニュ伯妃マリーへの献辞と、『聖杯物語』がときのフランドル伯フィリップ・ダルザスに献呈されている、という2つの事実である。マリーがシャンパーニュ伯アンリ1世と結婚したのは1164年だったから、『荷車の騎士』はそれ以降の作品ということになる。また、フィリップがフランドル伯に就任するのは1168年であり、彼は1190年3月に第3回十字軍に参加して出陣し、翌91年6月にアッコン前面で死去しているから、『聖杯物語』はおそらく伯が出征する前に執筆が開始されたものと思われる。この作品は未完に終わっており、彼はその執筆中に死去したものと推定されている。

以上の考察から、彼は12世紀後半、シャンパーニュ地方を中心とした北フランスを舞台に活動していたことが確認できるだろう。その間、『クリジェス』で語られる英国の地理が詳細で正確であることを理由に、一時期、彼がイングランドに滞在していたと推測する研究者¹⁴ もいるが、確証する術はない。

『クリジェス』の写本にも一言、触れておこう。¹⁵

この作品には、8篇の写本¹⁶ と3篇の断片が現存している。そのうち最古のものがパリ国立図書館所蔵の通称 Guiot 写本 (BN. fr. 794) である。その成立は1230-1235年頃と推定される。この写本を作成したギヨなる人物は、シャンパーニュ地方、プロヴァンの町のノートル・ダーム・デュ・ヴァル教会の近くに居住していた書籍商であり、彼はこれを売却する目的で作成したことが明らかになっている。¹⁷ この写本がその後たどった運命については、それが1725年、bibliothèque de Charles Cistery-Dufay から Imbert Châtre de Cangé に購入され、その後、同人によって1733年に国王に寄贈されたこと以外、何も知られておらず、それ以前の来歴については残念ながら何ひとつ確たる知見は得られない。

さて次に、物語の梗概を簡単に整理しておこう。

『クリジェス』は、主人公クリジェスの父母アレクサンドルとソルダモールの馴れ初めを語る第1部と、主人公とドイツ皇女フェニスのロマンス、そして叔父アリスとの三角関係が語られる第2部の2部構成になっている。親子2代の恋愛活劇といえば、ビザンツ史研究者ならばすぐに『ディゲニス・アクリタス』叙事詩¹⁸ との類似性を思い浮かべるかもしれない。だが、ここではそうした議論に深入りせず、こうした2世代の物語は、トマ・ダングリテールの『トリスタン』

における主人公の両親リヴァランとブランシュフルールの物語と釣り合いを取るためだった、というフラピエの説¹⁹を紹介するに留めておく。

作品の前段では、主人公クリジェスの両親の物語がかなり詳細に物語られている。

「コンスタンティノープルとギリシアの皇帝」アレクサンドルの長子、同名のアレクサンドルは、長じるに及んで、広く世に知られたアーサー王の宮廷に赴き、同王から騎士に叙任されることを熱望するようになる。彼は父帝の慰留を振り切り、イングランドへと向かう。

その地で彼は武名を挙げ、望みどおりアーサー王から騎士に叙任される一方で、同王の姪（王の甥ゴーヴァンの妹）ソルダモール²⁰と恋に落ち、王妃グニエブルの配慮で両人は結婚、その14ヵ月後には嫡男クリジェスが誕生した。

その頃、コンスタンティノープルでは父帝に死期が迫っていた。彼はイングランドから長子アレクサンドルを呼び戻そうと使節団を派遣するが、彼らを乗せた船は途中で難破してしまう。唯一人生き残った使者は、弟アリスに心を寄せている人物であった。彼は、帰路、乗船が難破しアレクサンドル皇子を含む全員が落命したと嘘をついて弟アリスが帝位に就く道を開いたのである。

とかくするうち、故国で弟が帝位に昇ったことを知ったアレクサンドルは、急遽、妻子と40人の騎士を率いて帰国、アテネ滞在中のアリスと談判に及んだ。後者は顧問たちの勧め²¹で兄との妥協を図り、結局、アリスは皇帝としての名目的な地位とそれに伴う栄誉は保持するものの、帝国全土の統治権はアレクサンドルに引き渡すこと、そしてアリスは生涯、結婚せず、彼の死と共に帝位はクリジェスに継承されること、が両者の間で取り決められたのである。

その後、アレクサンドルとソルダモールは相次いで世を去り、物語の第1部は慌しく幕を閉じる。アレクサンドルは息子クリジェスに、彼もまたアーサー王宮廷を訪ね、修行を積むよう言い残して息を引き取ったのである。

皇帝アリスは、その後、数年間、兄との約定を守り、独身を保ってきたが、取り巻きたちの熱心な勧めに考えを改め、結婚することを決意する。皇妃候補として名が挙げたのは時のドイツ皇帝の娘フェニスだった。南ドイツ、ラティスボン（レーゲンスブルク）の宮廷で求婚の使節を迎えたドイツ皇帝は、彼女がすでにザクセン公と婚約していたにもかかわらず、それを破棄してこの申し出を了承する意を示したのである。

皇帝アリスは婚礼を挙げるため、甥クリジェスを伴い、大軍を率いて、その頃ドイツ皇帝が宮廷を移していたケルンの町に赴いた。ところが、両皇帝の対面の場で出会ったソルダモールとクリジェスは一目で恋に落ちてしまう。婚礼の当日、フェニスは魔術に長けた侍女テッセラが調合した秘薬をアリスに飲ませ、彼に彼女の幻像を抱かせることで、好きでもない男に肉体を支配されることを巧みに回避したのである。²² 帰路、一行はラティスボン近郊でフェニスの身柄の強奪を図るザクセン公の軍勢の急襲を受けるが、クリジェスの活躍で事なきを得ている。

その後、フェニスに心を残したまま、クリジェスは父の遺言に従ってアーサー王の宮廷へ武者修行の旅に出た。本稿の冒頭で紹介したオックスフォードの馬上槍試合の挿話はこのときのことである。

しかしフェニスへの思いは断ちがたく、ほどなくしてクリジェスはギリシアに帰国する。兩人

は長い対話の末にお互いの思いを確認し合い、あわせてフェニスは秘薬の力でアリスを欺いた事の次第をクリジェスに語る。2人でブリテン島に駆け落ちしようというクリジェスの提案を一蹴し、彼女は自分たちの名誉も傷つけず、世間の非難を浴びぬような別の計画を明らかにした。彼女は侍女テッセラの第2の秘薬を用いて死を装い、その後、密かに墓所から脱出して秘密の隠れ家でクリジェスとの愛の生活を送ろうと考えたのである。

計画は成功し、恋人たちは、クリジェスの従者ジャンがコンスタンティノーブルの郊外に造営した秘密の塔の豪華な地下室で15ヶ月にわたって甘い生活を送ったのである。やがて春が訪れ、ナイチンゲールの囀りに誘われた2人は、地下室を出て、高い壁に囲まれた塔の美しい果樹園で過ごすようになる。

逃げたハイタカを追って1人の騎士が果樹園に侵入したことで、安逸の日々は突然、終止符が打たれた。彼はそこで2人の恋人を発見する。騎士はすぐさまそれを皇帝アリスに報告、クリジェスとフェニスは皇帝の差し向けた追っ手を逃れてアーサー王の宮廷へと逃亡した。

アリスの違約とクリジェスの窮状を耳にして憤慨したアーサー王は大軍を集めてコンスタンティノーブルへ征討の軍を進めることを決断する。だが、そこにアリス憤死の報が届く。クリジェスとフェニスはコンスタンティノーブルの正統な支配者として迎えられることになり、ここにおいて物語はハッピーエンドで大団円を迎えるのである。

天沢退二郎氏の評するところによれば、この物語は「巧みな設定により、この愛は不倫ではなく、伯父の存在もまた合法的に除かれ、ヒーローとヒロインは理想の夫婦の具現者となる」のである。²³

ジョルジュ・デュビーは、この物語の背景として、この時期、貨幣経済が発展し、それに伴って貴族の資産において不動産が占める比重が低下したことを指摘し、資産の流動性が高まったことで、次男以下に独身を迫る従来の家門政策が緩み、多くの戦士が自前の家庭を築くことが可能になったことを想定している。²⁴

この物語の末尾に付された意味深長なエピローグについては、後で改めて検討を加えることにしたい。²⁵ また、物語の登場人物からいやでも看取されるトリスタン説話との関連性や、他の多くの文学作品にも登場する「偽りの死」の主題をめぐる議論などは、専門の文学研究者の考察に委ね、ここでは立ち入らないことにする。²⁶

以下においては、我々歴史研究者にとって関心的である物語と史実の対応関係を論じた研究に対象を限定し、まずそれらについて発表された年代順に要点を整理する作業から取り組むことにしよう。

III 史実の探索

ここでは、これまでに発表されてきた『クリジェス』の歴史上のモデルをめぐる議論を、公刊された年代順に要約、列挙することにする。その際、これらの学説相互の比較を容易にするため、以下で紹介する先行研究中の議論は、物語の主軸を成す、帝位をめぐる叔父と甥の確執、および

ドイツ皇帝家との通婚交渉という2つの論点に絞ることにし、それ以外の箇所と史実との関連に触れた部分は必要に応じて論及するに留めることにしたい。

まず、1908年に公刊されたF. セッテガストの説から始めよう。²⁷

彼は、物語の主要な登場人物のモデルとして、11世紀後半にビザンツで権力を握ることになるコムネノス家の人々を思い浮かべている。すなわち、物語冒頭でコンスタンティノーブルの帝位にあった老アレクサンドル（同名のアレクサンドルおよびアリスの父）は、同家で初めて帝位に登ったイサキオス1世（在位1057-1059）、そして前記2兄弟を、同帝の甥イサキオスとアレクシオスの兄弟に比定しているのである。

彼はその根拠として、先代の皇帝と年長の息子（実際には甥）の名前が同一であること、²⁸ 弟のアレクシオスの名はアリスの中に面影を留めていること、を指摘している。さらに、1081年のコムネノス兄弟の反乱と権力掌握に際して、兄のイサキオスが帝位を弟アレクシオスに譲り、自らはセバストラートルの称号を得て専ら内政を主管したことも、物語の中の2人の兄弟の間で結ばれた協定に符合する事実として彼は指摘するのである。

彼の挙げる傍証はこれに留まらない。先にも述べたように、物語の中で主人公クリジェスはドイツ皇女と恋に落ちるのだが、それと同じように、1082年頃、セバストラートル、イサキオスの長子（セッテガストは名を挙げていないが、それが後のセバストス、デュラキオン長官のヨハネス・コムネノスであるのは間違いない）とドイツ皇帝ハインリヒ4世の娘アグネスの縁組みが外交ルートを通じて進められていたのである。²⁹ しかも、物語の中でビザンツ側が結婚を申し込んだ際、ヒロインのフェニスはすでにザクセン公と婚約していたのとまさに同じように、アグネスもシュヴァーベン公フリードリヒ（バルバロッサ帝の祖父）と婚約中だったのである。

セッテガストによれば、史実のシュヴァーベン公が物語ではザクセン公に改められているのは、ハインリヒ4世とザクセン人との間の長期にわたる敵対関係の記憶が反映されていたのだという。ただし、史実と物語が相似するのはここまでであり、実際にはビザンツとドイツ両宮廷間の交渉は最終的には不調に終わり、アグネスは当初の計画通りシュヴァーベン公の許に嫁いでいる。³⁰ そのため、皇帝と皇妃、そして若い皇帝の甥との間の三角関係のモデルは、この後で見るように別のシチュエーションに求められねばならなかった。

他方、主人公クリジェスのモデルと目されるセバストラートル、イサキオスの長子ヨハネスに視線を転じるとすれば、彼とドイツ皇女との間の縁談が交渉されていた頃、彼の叔父であるアレクシオス1世帝にはまだ嫡出子がなかったから、その時点では彼が帝位継承予定者となる可能性も小さくはなかった。子のない皇帝の後継者として皇帝の兄の息子が想定される、という物語と同じ筋立てがそこに認められるのである。これに加え、セッテガストは触れていないが、デュラキオン長官在任中の1091年頃に叔父アレクシオス1世に対する謀反の容疑をヨハネスがかけられていること³¹も、叔父に約定を破られ、帝位継承の望みが薄れたクリジェスの立場と重なり合うものがあるように感じられる。

彼はまた1096年8月にデュラキオンの町で第1回十字軍に参加したユーグ・ド・ヴェルマンドワ（仏王フィリップ1世の弟、ルイ7世の大叔父にあたる）の接遇にもあたっている³² ので、彼

の噂はフランス王家の周辺にも伝わっていたことは充分ありえることだろう。

他方、セッテガストが、皇帝を出し抜いて皇妃と結婚するロマンの主人公のモデルとして挙げているのが、11世紀前半にビザンツの帝位を占めたミカエル4世（在位1034-1041）である。彼は政府の要人だった兄の仲介で宮廷に入り、女帝ゾエの愛人となって彼女の夫であるロマノス3世（在位1028-1034）を殺害、彼から帝位を奪った人物である。³³ セッテガストは、この11世紀前半のエピソードが西欧に達したのは12世紀半ばのもう一人のミカエル、すなわちミカエル・グリュカスの年代記を通じてであると推定し、このグリュカス（ギリシア語で「甘美な」、「愛らしい」の意味にも解される）の名から「クリジェス」という主人公の名前が得られたのだと推理する。³⁴

次に『クリジェス』の史的モデルの探求と作品の年代画定において今日、通説の地位を築いているアンティーム・フリーエの学説を紹介しよう。³⁵

彼は、1170年から1176年にかけてビザンツとドイツの両宮廷間で展開された活発な外交活動を、物語の背景に想定している。その際に彼が注目するのが交渉の舞台となったドイツ皇帝の宮廷所在地である。

『クリジェス』によれば、最初にドイツ皇女に求婚するためにコンスタンティノープルからの使節が現れるのはラティスボン（レーゲンスブルグ）の宮廷であり、次いでコロニュー（ケルン）でアリス、クリジェスらの臨席のもと盛大な婚礼が執り行われ、そして一行は帰途、ラティスボン近郊のドナウ河畔でザクセン公の襲撃を受けることになる。³⁶

このラティスボン、コロニュー、ラティスボンという順序に彼は注目する。そしてそれに合致する事例を渉猟した結果、前述した1170-1176年の時期に行き着いたのである。以下、フリーエの説明に従って事実関係を記せば以下のようなになる。

1170年5月24日、聖霊降臨祭にドイツ皇帝フリードリヒ1世バルバロッサはラティスボンに宮廷を開いた。フリーエによれば、「マインツ大司教クリスチアンをコンスタンティノープルに派遣したのは明らかにそこから」であった。³⁷

翌1171年6月、バルバロッサはケルンに盛大な入市式を行なう。ここにビザンツ使節が来訪し、彼の息子とビザンツ皇帝マヌエル1世の一人娘マリアとの結婚が協議された。³⁸ さらにこの協議を継続させるために、翌1172年初頭にはウォルムス司教コンラートがコンスタンティノープルに派遣されることになった。このドイツ使節の一行には、聖地巡礼に向かうザクセン大公ハインリヒも同行していた。

フリーエが語るところによれば、ドイツ皇帝の最大のライバルであったザクセン大公は、『クリジェス』に登場する彼の同輩同様、ビザンツとドイツ皇帝家の間に婚姻同盟が成立するのを自己の利益に反するものと考えていた。彼は聖地からの帰途、コンスタンティノープルに立ち寄って皇帝マヌエルと会見しているが、ここで両者による反バルバロッサ同盟が協議された、とフリーエは推定している。

1174年6月24日、ラティスボンで帝国集会が開催され、そこにはザクセン公ハインリヒの姿もあった。ここに来訪したビザンツ使節は、バルバロッサと婚姻同盟について最後の協議を行な

ったが成果はなかった。

その後、フリードリヒ・バルバロッサとハインリヒ獅子公との関係は、1175年のバルバロッサ帝の北イタリア遠征にハインリヒが増援軍を送ることを拒否した挙句、翌78年5月、レニャーノの戦で皇帝軍が甚大な敗北を喫したことで決定的に悪化した。両者の対立は最終的には獅子公の失脚と帝国追放に帰着するのである。

フリーエによれば、『クリジェス』の成立は、バルバロッサと獅子公の対立が公然化した1176年以降のことであり、ザクセン公を敵役にする設定は、ドイツ皇帝に好意的なシャンパーニュ宮廷の空気を反映しているのだという。³⁹

フリーエは上記のごとく事実関係を整理したうえで、作者のクレチアンは、これを文学作品として仕上げるために以下の3点について事実を改変したのだと論じている。第一に、実際の外交交渉の場ではドイツ皇帝の息子とビザンツ皇帝の娘の間の結婚が協議されたのだが、『クリジェス』では男女の組み合わせが逆になっていること。第二として、実際には交渉は決裂したが、物語では成立していること。そして第三に、史実ではビザンツ皇帝はザクセン大公と結託してドイツ皇帝に対抗しているのに対して、物語では2人の皇帝は一致して敵役であるザクセン大公と対決していること、以上である。

なお、フリーエは、『クリジェス』が1176年前後に成立したという自説を補強する傍証として、この時期、ボーヴェー司教にルイ7世王の甥フィリップ・ド・ドリュエが就任していること⁴⁰を挙げている。クレチアンは『クリジェス』の種本をボーヴェーの聖ピエール大聖堂附属図書館で見つけたことを物語の冒頭で明言している(v.21)のだが、フリーエによれば、クレチアンが自由に同市の聖堂附属図書館をぶらつく機会を得たのは、フランス王家、シャンパーニュ伯家いずれとも親密な関係にあった⁴¹文芸愛好家の司教が就任したこの時期のことと推定されるからである。⁴²

以上のフリーエ説に対して全面的な反論を展開しているのがJ. ミスライである。⁴³

彼は『クリジェス』の全体的な筋立ての背景に取り立てて1170年代のフランス・ドイツ・ビザンツ関係を認める必要はなく、ドイツ皇帝とザクセン大公の対立に注目するならば、それはバルバロッサとハインリヒ獅子公の間の対立よりも、後者の父親ハインリヒ倣岸公とコンラート3世とのそれの方が物語のモデルとして相応しいと主張する。

さらにミスライが語るところによれば、フリーエ説の根拠は物語の舞台がラティスボン、ケルン、ラティスボンと移動してゆくことと、ドイツとビザンツとの間で政略結婚が協議されたことだけであるが、史実に照らせば、この縁談の男女の当事者の取り合わせが逆であり、また縁談自体、決して成立しなかったことに加え、舞台の移動に関する議論に関しても重大な現実との齟齬が生じていたのである。

すなわち、最初のラティスボンの場では、物語ではドイツ皇女に求婚するためにビザンツ使節が登場するのだが、史実ではそうした事実はなく、フリーエは、この地からコンスタンティノープルへドイツ皇帝の使節が派遣された、という確証のない推論を提示しているだけなのだ。

次にケルンに関して言えば、史実では1171年6月にバルバロッサの長男とマヌエル1世の一人

娘の結婚を協議するためにここにビザンツ使節が現れている。これが記録に残る最初のビザンツ使節であることをミスライは強調する。一方、物語の中でケルンに到着しているのはただの使節ではなく大軍を率いた皇帝アリスその人であった。しかも彼の来訪の目的は、交渉ではなく、1回目の交渉で合意済みのドイツ皇女との盛大な婚儀を執り行うためであった。

さらに2度目のラティスポンをめぐって牽強付会の度合いはさらに強まり、1174年、最終的に決裂した外交交渉と、物語における同市近郊でのザクセン大公による花嫁強奪作戦とを結びつけるのはどう見ても無理がある、とミスライは指摘している。

以上の議論と関連して、ミスライは、物語に登場するラティスポンとケルンという2つの都市のうち、ラティスポンはバルバロッサのお気に入りの滞在先のひとつであったこと、ケルンはそれと比べれば訪問回数は少ないにせよ、フランス人にはよく知られた有名な都市であり、ここで挙げられていても別段、不思議がる必要はないのだと言い添えている。

さらに彼がフリーエ説の致命的欠陥として指摘するのは、後者の主張する1170-1176年説では『クリジェス』の物語の主要なプロットを成す先代皇帝死去後、残された皇子たちの中で弟が兄を出し抜いて帝位を奪う、というモチーフが欠落していることである。

この点で彼がこうした設定に合致する事例として挙げているのが1143年のマヌエル1世即位時の状況である。この年、父ヨハネス2世（在位1118-1143）が没したとき、マヌエルは兄イサキオスを巧みに排除して権力を掌握することに成功した。

その後、1146年に彼はドイツ皇帝コンラート3世の義理の姉妹ベルタ・フォン・ズルツバッハと結婚しているが、その際、彼はベルタがコンラートの養女、つまりドイツ皇帝の娘、という資格を帯びることにこだわった。この点でミスライは、『クリジェス』と同様、ビザンツ皇帝とドイツ皇女の取り合わせが成立したことを強調する。しかも、当時、ドイツ皇帝の最大のライバルは、物語と同様に、ドイツ皇女を妻にもつザクセン大公だった、というのである。⁴⁴

以上の議論を踏まえてミスライは自信をもってこう断言している。「もしも具体的に歴史的状況が本当に『クリジェス』の中でほのめかされており、それによって terminus a quo 「始期」が示されるとしたら、それは私が思うに1171年や1176年であるよりもむしろ1146年である公算が高いだろう」⁴⁵

続いて1962年にアンリとルネの2人のカーン（兄弟？）の連名で公刊された論文⁴⁶の考察に移りたい。

ここでは、フリーエが提示した基本的設定が受け入れられ、ビザンツ皇帝アリスがマヌエル1世、逸名のドイツ皇帝がフリードリヒ・バルバロッサ、そしてザクセン大公がハインリヒ獅子公に同定されている。こうした前提に基づいて、この論文は、物語の主人公であるクリジェスの歴史的モデルとして極めてユニークな人物を選び出している。それは当時のルーム・セルジューク朝スルタン、キリジ・アルスラン2世（在位1156-1192）である。カーンがこうした結論にたどりついたプロセスをたどると以下ようになる。

『クリジェス』において作者のクレチアンは、主人公クリジェスとドイツ皇帝を極めて好意的に描き出す一方で、ビザンツ皇帝アリスとザクセン大公を彼らの敵役として登場させている。そ

してドイツ皇帝とザクセン大公の対立関係を踏まえるならば、クリジェスのモデルはマヌエル 1 世の敵対者たちの中から選ばねばならず、そこで第一に浮上するのが上述したスルタンだといふのである。

カーンによれば、このスルタンの公的な名であるキリジ・アルスラン *Kilidji Arslan* が *Kilidji* と *Arslan* という 2 つの構成要素に分けられ、その前半分に接尾辞 *-s* を付した *Kilitzēs* という形からクリジェス *Cligès* の名が成立したのだといふ。そしてその際、作者のクレチアンは、本来、赤の他人だったビザンツ皇帝とスルタンの関係を、物語では叔父と甥に改め、両者の政治的対立関係は一人の女性をめぐる恋の鞘当てに書き改められたのだ、と、説明しているのである。⁴⁷

カーンの議論は、これまで十分な説明が与えられてこなかった「クリジェス」という主人公の名前の由来についてほとんど初めて検討に値する説を提示している点においては評価できるものの、ビザンツの正統な帝位継承予定者の正体がイスラム教徒のトルコ人君主だった、というその結論は、どうしてもいささか突飛な感じは否めないだろう。

そうした疑問に対して、カーンは、スルタンに対する拒否反応を緩和させた要因として、彼が高貴なキリスト教徒女性の息子だった、という伝承があったことを指摘している。

その伝承によると、スルタンの母親は、第 1 回十字軍の有名な指導者の一人レーモン・ド・サン＝ジルの姉妹イサベルだったといふ。彼女のもう一人の兄弟トゥールーズ伯ギョームはアリエノール・ダキテーヌの曾祖父にあたる。これらの家系は当時、聖地の十字軍国家のうちアンティオキア公領、トリポリ伯領を支配していたから、この伝承を信じるとすれば、スルタンはラテン的東方世界で最も名高い家系のひとつと縁戚関係にあったことになる。⁴⁸

スルタンを物語の主人公と結びつけるもうひとつの手がかりとしてカーンが指摘しているのは、前者がドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサとの間で交わされていた婚姻同盟交渉である。

1173 年、スルタンの使節がバルバロッサの宮廷を訪れ、スルタンの息子とバルバロッサの娘との結婚を申し入れた。結局、この縁談はバルバロッサの娘の早世によって消滅するのだが、この挿話には、求婚してきたのはスルタン本人だった、という異説があったことにカーンは注目している。その場合には、状況は『クリジェス』の設定といっそう適合するからである。⁴⁹

この交渉の際、スルタン以下、彼の臣民全体がキリスト教に改宗してもよい、という提案があったことが伝えられている⁵⁰が、一説によれば、既にスルタン自身はキリスト教を信仰していた。という同時代の風聞もあったようだ。⁵¹

さらに、マヌエル帝とセルジューク朝スルタンとの対立の構図が『クリジェス』の筋立てとよく似た展開を示している 3 番目のポイントとして、カーンは、1176 年の有名なミュリオケファロンの敗戦後の皇帝の精神的落ち込みと心身の衰弱ぶりを伝える記述を指摘している。そこに見られる皇帝の描写は、カーンによれば、物語の末尾近くで、甥と妻の背信と逃亡を知り、悲憤慷慨のあまり命を縮めてしまう皇帝アリスの有様と酷似しているといふのである。

以上の考察を踏まえて、カーンは、『クリジェス』の成立をミュリオケファロンの会戦以後、すなわち 1176 年 9 月以降、おそらく同年中、と想定している。カーンが考えるところによれば、この作品は、史実に素材を得る一方で、それを騎士道文学のコードに従って脚色することで成立

しているのである。

最後に参照されるのは、1972年に公表されたイヴァンカの説である。⁵²

まず彼女は、カーンの説を踏襲して、主人公クリジェスの名前がルーム・セルジューク朝スルタン、キリジ・アルスラン2世に由来することを確認する。しかし、彼女が物語の真のモデルとして想定しているのはスルタンではなかった。彼女によれば、それは、ハンガリーの王子で皇帝マヌエル1世の娘マリアの婚約者ベーラ・アレクシオス（後のハンガリー王ベーラ3世）だったのである。イヴァンカは、1162-1172年頃のビザンツとその周辺地域の政治情勢を考察し、そこから以下のように自説を展開している。

1164年、ハンガリーの王位争いに介入したマヌエル1世は、同国王イシュトバーン3世と和平協定を締結、その結果、同王の王位保持が認められた一方で、彼の後継者には彼の弟ベーラが就くことが取り決められた。同時にマヌエルは、ベーラをコンスタンティノーブルに呼び寄せ、アレクシオスと改名させた上で、自分の一人娘のマリアと婚約させている。これと併せて彼にはデスポテースの称号が与えられ、帝位の後継者として宣言された。⁵³

ところが1168年、マヌエル帝に待望の男子（後のアレクシオス2世）が生まれる。母親は同帝が最初の妻であるドイツ出身のベルタと死別した後、1162年に再婚していたアンティオキア公家出身の皇后マリアである。この結果、ベーラ・アレクシオスはビザンツの帝位に就く可能性は閉ざされることになった。彼は皇女マリアとの婚約も解消させられ、ハンガリーに帰国することになる。以上の経緯は、在位中のビザンツ皇帝の結婚により、それまでの帝位継承予定者の権利が侵害されている、という点において『クリジェス』の筋立てと一致している、というのがイヴァンカの言い分である。

こうした一連の出来事は、1172年、聖地巡礼からの帰途、小アジアを横断中のザクセン大公ハインリヒがヘラクレイアでスルタン、キリジ・アルスラン2世と会談したおりに後者からザクセン大公に伝えられたとイヴァンカは想定する。彼女の推察するところによれば、ハインリヒ獅子公は帰国直後の1173年にシャンパーニュ宮廷を訪ねてトロワの町に滞在した際に、旅の土産話としてこうしたビザンツの国内事情を伯妃マリーに語った可能性が高い。かくして情報源となったスルタンの名が主人公のそれに刻印を残す一方で、ハンガリー出身のベーラ・アレクシオスの帝位継承権剥奪をめぐる一連の事件が物語の骨組みを定める上で大きな役割を果たしたのである。そうした理解に立てば、『クリジェス』の成立は1172/1173年以降、というのがイヴァンカの下した結論である。

ここまで見てきたように、『クリジェス』の筋立てと主要な登場人物のモデルを史実の中に探し出そうとするこれまでの試みは、実際のところ研究者ごとにまったくバラバラの結論に立ち至っていることがわかる。改めて主人公のクリジェスと彼の叔父で敵役のアリス、それに主人公の父親アレクサンドルに限定して先行研究が挙げているモデルを、各研究者が想定するこの作品の成立年代と併せて図示すれば右のようになる。

表を一瞥すれば分かるように、アリスのモデルとして作品と同時代のビザンツ皇帝マヌエル1

研究者名	クリジェス	アリス	アレクサンドル	成立年代
セツテガスト	ヨハネス・コムネ ノス	アレクシオス 1 世	イサキオス・コムネ ノス(左記皇帝の兄)	?
セツテガスト (第 2 案)	ミカエル 4 世	ロマノス 3 世	言及なし	?
フリーエ	該当者なし	マヌエル 1 世	イサキオス・コムネ ノス(左記皇帝の兄)	1176
ミスライ	言及なし	マヌエル 1 世	イサキオス・コムネ ノス(左記皇帝の兄)	1146
カーン	キリジ・アルスラ ン 2 世	マヌエル 1 世	言及なし	1176 末
イヴァンカ	内実はベーラ・ア レクシオス	マヌエル 1 世	言及なし	1172/1173

世を推す声が高いが、それ以外の点については目立った一致点はほとんどない。主人公がルーム・セルジューク朝のスルタンの名に由来するという説は、セツテガストの推すグリュカス説を除けば他に見るべき解釈が見当たらない、という限りにおいて真摯に受け止めるべきかもしれない。ただし、そうかと言って、カーンのようにそこから一足跳びにスルタンと物語の主人公を直結させるのはやはりいささかの躊躇を覚えてしまう。

結局のところ、複数の時代が物語のモデルとして多くの研究者たちに提示され、そのいずれもが物語の設定と完全に一致してはいない、という点を鑑みるならば、いずれの説も仮説の域を出ていない、というドナルド・M.マドックスの結論に行き着くことになるだろう。⁵⁴

そこで、ここでは物語のモデル探しの試みをいったん中断して、これまでの議論から明らかになってきたビザンツ情報の西欧への伝達過程について考察してみたい。というのも、『クリジェス』が成立した 12 世紀後半のシャンパーニュ伯宮廷には様々な回路から、思いのほか豊かなビザンツ・東方情報が集まっていたことが分かってきたからである。

IV 情報の結節点としてのシャンパーニュ宮廷

クレチアン・ド・トロワの庇護者マリー・ド・シャンパーニュの夫、シャンパーニュ伯アンリ 1 世(「寛大伯」le Libéral という異名をもっていた)は、フランス王家はもちろん、イングランドからドイツ帝国、そしてローマ教皇庁やビザンツ帝国に及ぶ広大な世界から様々な関係筋を介して情報を得ることのできた、という点でこの時代では極めて特異な才能の持ち主だった。⁵⁵

まず、彼は三重の婚姻関係でカペー朝のフランス王家と結ばれていた。すなわち、彼自身が 1153 年にフランス王ルイ 7 世とアリエノール・ダキテーヌの娘であるマリーと婚約、彼女と 1164 年に正式に結婚したことに加え、同じときに彼の弟のプロワ伯ティボー 5 世がマリーの妹アリックス

と結婚、さらにそれ以前の1160年には伯の姉妹アリックスがルイ7世の3度目の結婚相手として嫁いでいるのである。この結果、伯はフランス王ルイ7世の義理の兄弟かつ娘婿かつ王女の義兄、というややこしい立場になった。次のフランス王フィリップ2世オーギュストは彼の甥にあたる。さらにルイ7世王の弟ロベール・ド・ドリュエとも彼は懇意の仲にあり、共に第2回十字軍に参加したことに加え、パレスティナから帰国した1149年春には早速、共同でトーナメント競技を開催して聖ベルナルドゥスを嘆かせたという。

イングランド王家との所縁も深い。彼の祖父、ブロワ伯エチエンヌは、ウィリアム征服王の娘と結婚していたから、彼は征服王の曾孫にあたる。同時代の英王ヘンリー2世は母マチルダを介してやはり征服王の曾孫だったから、アンリ伯とヘンリー2世は又従兄弟の関係にあった。

イングランド関係の人脈はこれに尽きるものではない。彼の父方の叔父には、マチルダ、ヘンリー母子と激しく王位を争ったスティューヴン・オブ・ブロワやイングランドのグラストンベリ修道院長とウィンチェスター司教を歴任したヘンリー（アンリ）がいた。⁵⁶

グラストンベリと言えは12世紀末に「アーサー王の遺骨」が敷地内から「発見」されたアーサー伝説所縁の地、そしてウィンチェスターは『クリジエス』が語るように同王の宮廷所在地だったことが思い出される。アーサー王説話がシャンパーニュ宮廷に伝来した重要なファクターとして、イングランド政界で重きを成したこの叔父の存在を想定するのは不当ではないだろう。

これに加え、伯妃マリーの母親アリエノール・ダキテーヌは当時、英王ヘンリー2世と再婚していたから、このカップルから生まれた子供たち（リチャード獅子心王、ジョン欠地王、ザクセン公妃マチルダなど）は、伯妃の異父兄弟であった。

他方、シャンパーニュ伯はドイツ皇帝家とも複数の接触回路を有していた。

まず、彼はフリードリヒ・バルバロッサの妃ベアトリクスとは遠縁ながら縁戚関係にあった。⁵⁷ また、伯の母親マチルダの家系であるケルンテン公家はバルバロッサと密接な関係を持ったドイツ君侯の家柄である。⁵⁸

彼はシャンパーニュ地方の小さな封土をバルバロッサから授封され、この封土に関して自発的にドイツ皇帝に封臣としての宣誓を行っていた。このことで彼は名目的に帝国諸侯としての地位を享受することができたのである。

彼はドイツ皇帝との間に培ったこうした密接な関係を利用して、独仏両王家間の仲介者として尽力することになった。彼は1163年と68年にバルバロッサに書簡を送り、1171年に実現した独仏両王の会見の場にも同席している。1178年9月、ブザンソンで開催された帝国集会にも彼の姿があった。他方、バルバロッサの強力なライヴァル、ザクセン大公ハインリヒとも、伯の妃マリーの異父妹マチルダが1168年に嫁いでいたこともあり、友好的な関係が保たれていた。

これに対して、ローマ教会関係の人脈に関しては、伯がバルバロッサ寄りであったこともあり、ときの教皇アレクサンドル3世とはさほど親密な関係は結ばれてはいなかったようだ。しかし、その一方で、フランス国内では、伯は多くの有力な高位聖職者と親交を深めていたことが確認できる。まずサンス大司教かつ教皇特使のギョームは伯の実の弟だったし、ランス大司教アンリは国王ルイ7世の弟だから伯にとっては義兄弟ということになる。さらにボーヴェー司教フィリップ

ブは、前述したように、伯の友人、王弟ロベール・ド・ドリュエの息子であった。

こうした西欧一円に張り巡らせたネットワークと並んで、シャンパーニュ伯は、当時、ビザンツの帝位を占めたコムネノス朝の歴代皇帝と、3世代にわたって密接な関係を結んでいたことは特にここで注目に値するだろう。⁵⁹

寛大伯の祖父、ブロワ伯エチエンヌは第1回十字軍に参加してコンスタンティノープルに滞在した折、皇帝アレクシオス1世の歓待にいたく感激し、すっかりビザンツの魅力の虜になってしまったらしい。彼は行動を共にしていたノルマンディー公やフランドル伯らと共にアレクシオス1世に対して封建的な臣従礼をとり、皇帝が彼らを自らの「養子」に迎える儀式が執り行われた。さらにアレクシオス帝はエチエンヌ伯に対して、後者の息子をコンスタンティノープルの宮廷に送るよう申し入れたという。⁶⁰

「ビザンツ趣味」⁶¹は次の世代にも受け継がれたらしく、エチエンヌの息子の前述したウィンチェスター司教ヘンリーのパトロネージの下で作成された詩篇には、明らかにビザンツ美術の影響が認められるという。⁶²

アンリ伯自身、1147年、若き日に第2回十字軍に参加してコンスタンティノープルを訪れた際に皇帝マヌエル1世自身の手で騎士に叙任されていた。彼とマヌエル帝との関係が一過性のものではなかったことは、1180年にパレスティナからの帰途、小アジアでトルコ人の捕虜になったアンリ伯の身代金を皇帝が支払い、彼の自由を回復してやっていることから確認できる。⁶³

同じ1180年初頭には伯の姪にあたるフランス王女アニェスとマヌエル1世の嫡男アレクシオス2世が結婚している。だが、まもなく若いカップルに悲劇が訪れた。

1182年春、小アジアで反乱の兵を挙げたアンドロニコス・コムネノス（マヌエル1世の従兄弟）は、帝都に進軍、権力奪取に成功する。彼は当初、アレクシオス2世の権利を擁護するポーズを見せたが、自分の権力が十分に固められたと見るや、一転して翌1183年に当時14歳の少年皇帝を殺害し、残されたフランス王女と自ら結婚したのである。⁶⁴

こうしたスキャンダラスな政変劇の情報は時をおかず西欧の宮廷にも達していたらしく、英王ヘンリー2世の秘書官ウォルター・マップの著した『宮廷閑話』の中にも言及されている。⁶⁵

ただし、その際にマップは人物同定に関して2つのミスを犯している。ひとつはマヌエル帝の息子の名をアレクシオスではなく、マヌエルと誤記していること。ただし、後者がフランス王女と結婚していたことは正確に知っていた。そして2番目に、篡奪者アンドロニコスをマヌエルの兄弟だと誤解していたことである。⁶⁶

ウォルター・マップの思い描いた主要人物間の相関図を眺めていると、ここでも『クリジェス』の筋立てとよく似た構図が浮かび上がってくることに気付くだろう。

すなわち、ここでも話題に上っているのは、父からコンスタンティノープルの正統な帝位を受け継ぐことが予定されていた若者が、叔父のために権力の座から排除される物語なのである。しかも、若者と相思相愛のヒロイン（物語同様、西欧の王家出身）は叔父の妃になり、三角関係が構成される。

物語と史実が一致する点がもうひとつある。

物語では主人公たちの秘密の恋が叔父アリスに露見したとき、彼らはアーサー王宮廷に逃亡して王の保護と支援を獲得している。それとまったく同様に、アレクシオス2世と称する若者が1185年頃、仏王フィリップ2世オーギュストの宮廷に現れ、「義理の兄弟」として王の保護を求めたのである。もちろん、本物のアレクシオス2世は前述したようにアンドロニコスによって殺害されていたから、ここに現れた若者は偽者である。しかし、この黒っぽい髪の色をした小柄な偽皇帝はギリシア語、ラテン語、フランス語を流暢に操り、一時は宮廷の人気者となるほどで、フランドル伯フィリップとの会談もセットされたという。⁶⁷

ここに登場するフランドル伯とは、クレチアン・ド・トロワに『聖杯物語』の執筆を依頼したフランドル伯フィリップ・ダルザスその人に他ならない。このような視点から見れば、クレチアンがフランドル伯の周辺から、フランス王の宮廷に現れた王の親族のビザンツ皇子を称する若者の噂を聞きつけ、『クリジェス』の構想を膨らませたのだと想像することもあながち不当なことではあるまい。ヒロインが物語ではドイツ皇女になっているのも、フランス王家をはばかって設定を一部変更したのだと考えれば説明がつく。

ただし、この仮説は、一般に通説の地位を獲得しているA.フーリエの説と比べて、『クリジェス』の成立年代を10年近く遅らせることになり、それがネックとなって広い賛同を得ることは難しいかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、『クリジェス』の設定と酷似した出来事が1180年代前半のコンスタンティノープルで発生しており、北フランスやイングランドの王侯貴族たちが思いのほか身近にそうした情報に接していた、という事実を確認しておくことは今後の議論において極めて重要な意味を持つことになるだろう。

ビザンツ情報の西欧への伝来に関して、もうひとつの話題にもこの機会に触れておこう。それは、クレチアンが『クリジェス』執筆に際して物語の素材を得たことを明言している、ボーヴェーの聖ピエール聖堂附属図書館所蔵の書物の正体をめぐる議論である。

フラピエは、その書物を「恐らくラテン語の年代記か何かであろう」と推測して、そこには13世紀の挿話集成物語『マルケ・ド・ローム *Marques de Rome*』に類似した内容の物語が記されていたのだらうと想定している。⁶⁸

これに対して、プレイヤード版クレチアン・ド・トロワの編者フィリップ・ヴァルテルは、そうした書物自体が存在したことにはいささか懐疑的な態度を示している。彼が語るところによれば、中世においては、耳で聞いた情報より書物から得られた情報をありがたがる傾向があったため、作家たちは口承上のモチーフから作品の素材を得たと告白するのを嫌って、それを古い書物から得た、と主張するのが常套手段になっていた、というのである。

『クリジェス』に関して言えば、12世紀後半に流行していた古代風ロマンスの色合いにケルト的物語を加味させたものにすぎず、そこに感じられる色調は同時代のビザンツ文明から得られるそれに近似していたとはいえ、より直接的には、古典作品を翻案した同時代の物語作品から得られたものだった、というのがヴァルテルの見解である。すなわち、彼に言わせれば、クレチアンが作品の中で言及しているボーヴェーの大聖堂附属図書館所蔵の書物というのは、作者が読者を煙に巻くためにでっちあげたフィクションに他ならなかった、ということになる。⁶⁹

たしかにヴァルテルの所説は、中世の作家たちが古典作品をスタンダードなものとして尊重し、それらの翻訳、翻案に熱中していたという事実⁷⁰を踏まえており、それ自体、合理的で説得的な解釈と言えるだろう。また、同時代のコンスタンティノープル宮廷の内情を伝える政治的ゴシップやドイツ皇帝家との間で展開していた外交交渉の噂話ならば、既に述べたように、そうした情報は東方との間を往来していた十字軍関係者や巡礼を通じて西欧の王侯の宮廷に届いてははずだから、ことさらに情報源としての書物が必要だったわけでもないはずである。

だがこうした所説にはセツテガストの議論が対立している。彼によれば、『クリジェス』の中には本筋以外にも様々なビザンツ情報がちりばめられており、それらは、クリジェスの父アレクサンドルが率いた僚友たちのように11世紀の歴史上の人物がモデルとして想定される事例や、ヒロイン、フェニスの「偽りの死」以降の挿話のように第2イコノクラスム期（9世紀）の逸話が下敷きになっているケースが認められるというのである。⁷¹

もしもセツテガストのこうした議論が肯定的に受け入れられるとすれば、我々は、こうした相対的に古い時代のビザンツの情報を伝える書物の存在を想定しなければならなくなるのである。

この点に関してセツテガストが用意している解答は、12世紀後半のビザンツの文人ミカエル・グリュカスが著した年代記がラテン語に訳され、それをクレチアンが参照した、という推論である。なぜグリュカスかと言えば、前述したように「甘美な」「愛らしい」を意味する *γλυκὺς* という形容詞に由来する彼の姓から「クリジェス」という主人公の名前が作られた、とセツテガストは考えているからだ。⁷² しかし、彼は、どのようにしてグリュカスの年代記が西欧に伝えられ、多くの人々が利用できるようにラテン語に翻訳されたのか、という肝心な点についてはまったく説明をしておらず、この点において彼の仮説は極めて不十分なままにとどまっている、と言わざるを得ない。

こうした問題点に関して、ひとつの有効な打開策を示す可能性があるのが K.シガールの展開している議論⁷³であろう。彼は『クリジェス』の中で語られているコンスタンティノープルの宮殿内での女性たちの蜂起という挿話は、1042年、皇帝ミカエル5世（在位1041-1042）を失脚させた民衆暴動中の一事件から着想を得ていたと想定し、クレチアンがそれを知ったのは、この事件を報じているプセルロスとゾナラス、2種の年代記のうち、現存する写本の多さから見て、大量に流布していたことが推定されるゾナラスの方からだと判断する。⁷⁴

しかし、シガール自身が指摘しているように、ゾナラスのラテン語訳は今日、1冊も現存しておらず、このことが彼の議論の弱みになっていることは否めまい。そこで彼は、自説を補強するために14世紀に成立したゾナラスのアラゴン語訳を引き合いに出し、それがイタリア語かカタラン語、あるいはさらにラテン語からの重訳だったことを指摘して、そうしたラテン語訳が12世紀中に成立していた可能性を示唆しているのである。⁷⁵

12世紀にビザンツの歴史叙述が西欧に伝えられた可能性を強調するためにシガールはもうひとつの傍証を提示している。それは当時のアンティオキア総司教エメリ・ド・リモージュ（在位1139-1196）がコンスタンティノープルで皇帝マヌエル1世の顧問を務めるピサ出身の神学者フゴ・エテリアーノに宛てた書簡である。その書状の中で総司教はフゴに対してギリシア語の神学

作品と年代記のラテン語訳を送ってくれるよう依頼しているのである。

アンティオキア公国は、アリエノール・ダキテーヌの叔父レーモン・ド・ポワティエが 1136 年に公国の相続人コンスタンス（先代ボエモン 2 世公の娘）と結婚して以来、フランスとの結び付きを強めていた。その一方でアンティオキア公レーモンは、1145 年にはコンスタンティノープルを訪問してマヌエル帝との親交を深めており、公の没後の 1162 年には彼の娘のマリーがマヌエルの再婚相手として輿入れしている。このようにアンティオキア宮廷は一方でコンスタンティノープル、他方でフランスと密接な関係を結んでいた。総司教エメリ自身、仏王ルイ 7 世や英王ヘンリー 2 世と接触を保っていたことが知られている。⁷⁶

こうした状況の下で、フランス王女とマヌエル 1 世の後継者アレクシオス 2 世との縁談が進められる中、フランス王家がビザンツの情報を得るためにアンティオキア公家の周辺と連絡を取り、ラテン語訳された歴史作品などがフランスにもたらされた可能性があったことは否定できないだろう。

ビザンツの歴史に北フランスの王侯貴族が強い関心を抱いていたことは、クレチアの同時代人ゴーチエ・ダラスが 7 世紀のビザンツ皇帝ヘラクレイオスのペルシアとの戦いと真の十字架奪還の事業から想を得た『エラクル』といった作品を著していることから推察される。⁷⁷

以上の考察をまとめておこう。

クレチアン・ド・トロワが『クリジェス』を執筆していたと推定される 12 世紀最後の四半期、北フランスの王侯の宮廷にはしきりに行き来する外交使節や巡礼、十字軍参加者などから相当量のビザンツや東方世界に関する情報が寄せられており、またそれらに関する書物の量も日々、増大しつつあったと思われる。今回、言及した事例以外にも多くの縁組がコンスタンティノープルの皇帝家一門とラテン・キリスト教世界の王侯家門の間で交渉され、かなりの数の結婚の約定が結ばれたことが知られている。⁷⁸

12 世紀後半、アルプスの北で暮らす王侯貴族たちは、ある日、彼らの親族を名乗るビザンツの皇子が、不当に奪われた権利を取り戻すために支援を求めにやってくる、といった情景を身近に感じられる環境の中に生きていたのである。

V 心象世界の中のビザンツ像

クレチアン・ド・トロワの『クリジェス』を読み進めてゆくと、コンスタンティノープルの宮廷にまつわる主要な登場人物はおおむね以下の 3 つの範疇に区分できることに気づくはずである。

第一は、アレクサンドルやクリジェスに代表される「良きギリシア人」というカテゴリーである。彼らは不実で小心者のアリスと対置される存在だった。ここで「良き」という形容辞が付されているのは、あくまでも西欧側の視点から好ましい、共感が持てる、という価値判断が言外の意味として含まれていることに注意しておきたい。

2 番目は魔法使い、あるいは妖術師に類する人々である。これには皇妃フェニスの侍女テッセ

ラとクリジェスの従者ジャンが含まれる。彼らはいずれも超自然的な力を行使して主人公を助ける役回りを演じている。

そして最後の3番目のカテゴリーに属するのが、いずれも西欧から花嫁としてコンスタンティノープルの宮廷に入ったソルダモールとフェニスである。以下においてそれぞれのカテゴリーについてももう少し詳しく検討を加えておくことにしよう。

(1) 「良きギリシア人」あるいは学問と騎士道の西遷

前にも述べたように、十字軍の行軍中のトラブルなどが原因で、不実なビザンツ人に対する不満や非難の声が日増しに高まりつつあったこの時期に、西欧でビザンツの皇子を主人公にした物語が著され、しかも主人公やその父親が全体として極めて好感の持てる人物として描き出されていることには多少の当惑を覚えまいわけにはいかない。しかしそうした疑念は、テキストの冒頭に付された序文と、クリジェスの父アレクサンドルがとった行動を考え合わせれば難なく氷解するように思われる。序文において作者クレチアンは、次のように語っている。

「我らが有する書物によりて、我らは古代の人々の事々や過去の時代を知ることになる。我らが書物の告げるところによれば、最初にギリシアにおいて騎士道(chevalerie)と学芸(clergie)が名声を博していた。次いで騎士道はローマへ移り、学芸全般は今やフランスに到来している。それがこの地に留まるよう神が望まれますよう、この地に居を定めた栄光がもはや2度とフランスを離れることがないほどにそれを神が嘉してくださいますように！」(vv.27-39)

ここでクレチアンが言わんとしていることは、かつてギリシアは騎士道と学芸の中心として栄華を誇ったが、今やその中心の座はフランスへと移行していた、ということである。⁷⁹ 言い換えれば、ギリシアは過去の栄光を伝える地として一定の敬意は払われるものの、今や主役の座はフランスに譲っており、今では騎士道と学芸の中心地としてのフランスの地位は同時代のギリシアを凌いでいた、ということになる。おそらく「12世紀ルネサンス」と総称されるこの時代の西欧における学術活動の興隆、活性化がこうした自信にあふれた言動を生み出したのであろう。

そして、こうした理念に誠に素直に従おうとしているのが、クリジェスの父のアレクサンドルなのである。彼はコンスタンティノープルの皇帝の嫡男として何の支障もなく将来の帝位が約束されていたにもかかわらず、都を去って、アーサー王の宮廷で騎士としての修行を積むために旅立ってゆくのである。ウィンチェスターの王の宮廷に到着したとき、彼は王の前で跪き、次のような口上を述べた。

「陛下、あなた様の獲得された名声のゆえに、私はあなたに仕え、あなたに敬意を表すべくこの宮廷にまかりこしたのです。そして、私の奉仕に満足していただけるならば、決して余人の手によってではなく、あなた様自身の手で騎士としての武具をつけていただけるときまで、私がここに留まることをお許しください。と申しますのも、あなた様から騎士に叙任されたのでなければ、決して私は〔真の〕騎士と呼ばれることはないからです。」(vv.345-348)

こうした発言から、アレクサンドルは何のためらいもなく西欧の優位性を認め、心から西欧の騎士社会への同化を望む人物として描き出されていることが分かるだろう。

こうした西欧礼賛の観点に立てば、一見、不可解に見えるクリジェスの行動も明確な解釈が得られることをドナルド・L・マドックスが明らかにしている。⁸⁰

たとえば、ここで問題となるのは、フェニスへの思いを残したまま、彼が父の遺訓を守ってイングランドへの武者修行に旅立つ、といった場面である。彼の不在中、誓約に反して結婚した叔父アリスの権力はその間にさらに盤石なものになることは容易に予想されるから、彼の行動は運命に正面から立ち向かおうとしない、ひ弱な青年の現実逃避のような印象を受けがちである。そもそも叔父が誓約を反故にして結婚を決意したときにも、彼は異論を唱えることすらなく、あまつさえ花嫁を迎えるためのドイツへの長途の旅にも叔父に従って随行している始末である。

マドックスによれば、叔父の違約に対する主人公の優柔不断な態度は、彼がまだその時点では十分な責任を伴って行動しうる成人としての資格を獲得していなかったからであったという。彼が一人前の騎士として真の人格が完成されるためには、母方の親族の集うアーサー王宮廷でのイニシエーションを経て、後者から親族の一員として正式な承認を得る必要があった。オックスフォードでの馬上槍試合、その最後における叔父ガウェインとの一騎打ち、さらにはアーサー王宮廷での盛大な饗宴などを経てクリジェスは、母の親族たちの祝福と承認を獲得する。ここにおいて初めて、彼は、叔父アリスに対抗し、フェニスに求婚できるだけの資格を手にすることができたのである。

G.デュビーも指摘しているように、西欧ではこの当時、貴族の家系では一般に母の方が格上であることが多かったこともあり、男子は母の叔父の宮廷に伺候して行儀見習いを始め、騎士となるための修行を積む慣行があった。⁸¹ クリジェスの行動は、まさにこうした同時代の西欧の規範に服したものであり、そこには当然、母親の里の宮廷を父方のそれよりも上位に置く、という価値判断が前提にあったことは論を俟たない。そのように見れば、本来求められるべき騎士としての修練も積まず、生まれ故郷に留まったままで権力の座に居座ったアリスの姿は、極めて不当かつ不適切なものと解釈されるのである。⁸²

さて、ここで、再び話題をイングランドにおけるアレクサンドルの武者修行の時代に戻したい。

アーサー王の宮廷に到着した彼は、その見事な騎士ぶりで人々の感嘆を得るのだが、人々を驚かせたのは彼の武勇ばかりではなかった。彼はアーサー王と王妃、そして宮廷の諸侯一同の友情と敬意を獲得するために、父の皇帝から贈られた船2隻に満載された夥しい量の金銀やギリシアから連れてきた名馬を惜しげもなく人々に分け与えたのである。息子の出立に際して、父の老アレクサンドル帝はこう語った。

「 気前よさは全ての美德を照らす女主人かつ女王なのだ。… 気前よささえあれば賢者になるには充分だが、生まれや礼儀正しさ、知識、高潔さ、財産、力、騎士身分、武勲、権勢、美貌、その他のいかなるものをもってしてもそれは不可能だ。」 (vv.193-209)

西欧人が大好きで、騎士道かぶれで、やたらに気前のよい金満家のビザンツ人。なにやらどこ

かで聞いたような話ではないか。そう、それは時のビザンツ皇帝マヌエル1世コムネノスについて一般に伝えられているイメージそのものである。

彼がビザンツに西欧騎士の戦術を導入することに熱心で、彼自身、そうした新しい技術の習得に励んでいたことはよく知られた事実である。1159年、アンティオキア城外で開催されたトーナメントにおける彼の活躍ぶり⁸³は、物語の中のオックスフォードの馬上槍試合におけるクリジェスの晴れ姿を髣髴とさせるものである。また、彼が、コンスタンティノープルを訪問した外国の王侯に気前よく大量の金品を分かち与えたことについては、それこそ枚挙にいとまがないほど多くの報告が寄せられている。

ただし、マヌエルには物語のアレクサンドルと決定的に異なる点がひとつあったことを見落としてはならない。それは、彼が物語のアリス同様、基本的に国内に腰を据え、帝都コンスタンティノープルから彼の帝国を支配する姿勢を一貫して示していたことである。

コンスタンティノープルが世界の中心であることを自明の事実と考えていたビザンツの支配的エリートにとっては、世界の果てにも等しいアルプスの彼方の西欧の地に修行の旅に出ることなど、想像を絶する狂気の沙汰に思われたに違いない。⁸⁴知られている限りでは、皇帝に即位する以前にマヌエルが帝都周辺から離れたのは、1143年に父ヨハネス2世最後の東方遠征に同行した1度きりだったように思われる。

むしろ、はるかな旅路もものともせず、海山を越えてやってきたのは西欧の騎士たちの方であった。聖地の十字軍国家の歴史を著したティルス大司教ギョームが語るところによれば、皇帝が西欧人（ギョームはここで「ラテン人」という呼称を用いている）を高く評価し、惜しみなく気前のよさを示したので「ラテンの種族の民は、世界中から高貴な者も、そうでない者も、彼を大いなる恩恵提供者と看做して、競うように彼の宮廷に集まった」という。⁸⁵アーサー王の手によるアレクサンドルの騎士叙任の光景を裏返してみれば、それがマヌエル帝によって騎士に叙任された将来のシャンパーニュ伯アンリ1世の若かりし日の姿と重なり合うことに気付くだろう。

中世の文学作品の中でアーサー王の宮廷を描写する際には、巡礼などによって伝えられたコンスタンティノープルの華やかな宮廷生活がその祖形のひとつを成したことがしばしば指摘されている。⁸⁶ そのように見てゆくと、我々の目の前には非常にパラドキシカルな光景が広がってゆくことになるだろう。

クレチアンは『クリジェス』において、ビザンツ帝都の華やかで豪華な雰囲気にも包まれた宮廷を連想させるアーサー王宮廷を描写しながら、そこへ喜々として伺候するビザンツの皇子の姿を描き出すことで、ビザンツに対する西欧の優越性を強調する。ところがそれは明らかにマヌエル1世の宮廷に参集している西欧の騎士たちの陰画なのである。このような形でビザンツに対する自己の優位性を主張しなければならなかった当時の西欧の支配的エリートの姿は、本人が大真面目だけにいっそう滑稽に見えてしまう、といったら言い過ぎであろうか。

(2) 仙女と魔法使い

以下で論じるのは、超自然的な能力を駆使して主人の危機を救う2人の従属的な身分の男女である。そのうちの一人はフェニスの侍女テッセラ⁸⁷、もう一人は天才的な建築家で、宮廷を脱出した恋人たちに秘密の隠れ家を提供するクリジェスの従者のジャンである。本節では、この2人の個性的な人物の身辺を探求しつつ、これに関連するビザンツ側の情報を渉猟する作業に取り組みたい。

まず侍女テッセラから始めよう。

クレチアンの作品には、たとえば『獅子の騎士』においてヒロインのローディーヌを助けるリュネットのように、ヒロインを支える賢明な侍女がしばしば登場する。⁸⁸ その意味で、一見したところではテッセラは類型化された登場人物であり、西欧人が思い描く「ビザンツ人」の典型と看做すことは困難だと考える向きもあるだろう。

だが、作者が彼女のことを「ビザンツ人」ではないにせよ、「ギリシア人」としては十分に意識していたことは彼自身の言葉からすぐに明らかになる。というのも、彼によれば、テッセラという彼女の名前はそもそもテッサリアに由来しており、彼女が魔術 (*nigromance*) に長じていたのは、古来、悪魔学 (*la diablies*) が教えられ、実行されていたテッサリアの生まれだったからだというのである (vv.2984-2990)。

フィリップ・ヴァルテルによれば、*nigromance* という用語はギリシア語の *necromanteia* (「秘密を知るため死者の霊を呼ぶこと」=「招霊術」と *manicie* (「魔術」という2つの語の合成語であり、他方、テッサリア地方が魔術や妖術の本場だという評判は、オヴィディウス、ホラティウス、ユヴェナリス、ルキアノスなど古代ローマの作家たちに遡り、紀元4世紀のキリスト教徒のラテン詩人プルデンティウスが語るところによれば、テッサリアの地の魔術はその創始者であるメルクリウス神自身によって伝授されたのだと言う。⁸⁹

オヴィディウスには「テッサリアの毒」という慣用表現も認められ、同地の魔術の正体が毒薬を用いた謀り事であったことを窺わせている。次々と驚くべき効能を発揮する霊薬をつくり出すテッセラの原型は、こうした文学的伝統の中に見出すことができるのである。

だが彼女の姿を古びた書物の頁の中に閉じ込めておくだけでは充分ではない。K.シガールに言わせれば「毒薬と媚薬。これこそビザンツに典型的な要素なのだ。」⁹⁰ ここでシガールが話題にしているのは、皇帝ミカエル5世 (在位 1041-1042) が義母の女帝ゾエの排除を目論み、彼女が彼の毒殺を図った、という噂を広めようとしたという逸話である。⁹¹ この話を報じている同時代史家のミカエル・プセルロスが「毒をもる女」という意味で *φαρμακίδα* (主格は *φαρμακίς*) という語を用いている点は興味を引かれる。というのも、この言葉は「魔法使い」「魔女」という意味にも解釈できる用語だからである。

ゾエによるミカエル5世の毒殺計画に関しては憶測の域を出なかったとしても、彼女には、もっと確度の高い前科があった。彼女は若い愛人のミカエル (後のミカエル4世、在位 1034-1041、前述の同5世は彼の甥) と結婚するために、彼と結託して最初の夫ロマノス3世アルギュロス (在位 1028-1034) に毒をもって厄介払いに成功した、と伝えられていたのである。⁹²

そうでなくとも、私室に閉じこもり。冬でも夏でも多くの火鉢を並べて、召使たちを動員して

香水や軟膏作りに熱中していた、というプセルロスが伝える晩年のゾエ女帝の姿は、見ようによつてはかなり怪しげなものに見えたことは想像に難くない。⁹³

このように見てくれば、物語の中で様々な霊薬を調合するテッセラの背後に、古典作品の残影を認めるだけでなく、その100年ほど前にコンスタンティノーブルで暮らした薬と香水のマニアの女帝の面影を感じることもできるかもしれない。

これに関連して想起されるのは、中世ウェールズの伝承を集めた物語集『マビノギオン』に収録された「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」の中に、主人公に魔法の石を与え、彼の冒険を助ける「大クリスティノビル」(＝コンスタンティノーブル)の女帝が登場していることである。⁹⁴魔法と幻想の本場のようなケルト世界の中心でコンスタンティノーブルの女帝が神秘の力を発揮する魔法使いとして姿を現していることは注目に値することであろう。⁹⁵

次にクリジェスの従者ジャンに話題を転じよう。彼の名はギリシア語に改めるとヨハネスとなり、これはビザンツではありふれた、というより最もポピュラーな名前のひとつであった。⁹⁶

渡邊浩司氏は、神話学的研究の一環として、物語のジャンに福音史家の聖ヨハネやローマの双頭神ヤヌスの属性を読み取ろうとしている⁹⁷が、以下では考察の対象をビザンツに関連する分野に限定して議論を進めてゆくことにしたい。

最初に先行研究がジャンのモデルとして提示している歴史上の人物を確認しておこう。

多くの研究者は、天才的な建築家としてのジャンの才能に注目し、ヨハネスという名の建築家をビザンツ史上に探し求めた。たとえば、スティエノン⁹⁸は、6世紀にミレトスのイシドロスの同名の甥と共に地震で崩壊した聖ソフィア聖堂大円蓋の修復やユーフラテス河畔の都市ゼノビアの建設に従事したコンスタンティノーブルのヨハネスの名を挙げている。

セツテガストは、物語のジャンに2人の歴史上のヨハネスを重ね合わせている。一人は、王妃と若い恋人との逢瀬を支援する人物としての11世紀中葉の宮廷の実力者、宦官のヨハネス・オルファノトロポス、もう一人は、9世紀前半、第2次イコノクラスム期に総主教を務めた通称ヨハネス・グラマティコス(総主教としてはヨハネス7世、在位837-843)である。⁹⁹

第一の人物については多言を要すまい。彼は自分の兄弟であるミカエル(後のミカエル4世)と女帝ゾエとの仲をとりもち、彼らがゾエの夫である皇帝ロマノス3世アルギュロス¹⁰⁰を排除するのを手助けした人物である。

興味深いのは第二の人物の方である。¹⁰¹

外交使節としてバグダッドに派遣されたヨハネスは、カリフ宮殿の壮麗さを皇帝テオフィロス(在位829-842)に語り、それに触発された皇帝はカリフに劣らぬ離宮の建設をヨハネスに命じた。かくしてコンスタンティノーブルの対岸のアジア側に建てられたブリヤスの豪華な宮殿は、都の郊外に位置し、地上部分と並んで地下にも居住スペースがあったこと、美しい庭園で囲まれていたことなど、物語の中でジャンが建設した秘密の塔と多くの共通点を有していた、とセツテガストは考えている。¹⁰²

そしてセツテガストがブリヤスの離宮以上に、物語中のジャンの秘密の隠れ家との類似性を強

調しているのが、ヨハネスが彼の兄弟アルサベルの所有する帝都郊外の所領に有していた秘密の工場の記事である。スキュリツェスによれば、ヨハネスは兄弟の豪華な邸宅や柱廊、浴場など様々なレクリエーション施設が並ぶ一角に、ある種の地下屋敷を建設し、その裏側に設けた秘密の扉から出入りして、そこに修道女やその他の美女たちを集め、陶器や内臓による占いや魔法、交霊術などの怪しげな行為に耽っていたという。¹⁰³ こうした記述には、熱心な反聖像論者だった総主教を貶めようとする後代の年代記作家の悪意を考慮に入れるべきであろうが、そうした予見を持たずにこの文章を読むと、そこに漂うおどろおどろしい雰囲気にとじろいでしまうほどである。

セツテガストは、物語のジャンとヨハネス・グラマティコス秘密作業場の類似点として以下の4つのポイントを挙げている。

第一に、いずれの建物も、コンスタンティノープルの郊外だが、都のすぐ近くに位置していたこと。¹⁰⁴ 第二に、これらの建物には秘密を守るため、特別な工夫が凝らされていたこと。第三に、いずれの事例でも、そこでの生活の快適さを保障する一切の設備、とりわけ浴場施設が完備していたこと。そして四番目は、いずれの建物も、美しい女性を密かに住まわせるのに相応しいものだったこと。

セツテガストによれば、農奴身分のジャンが、生活環境の快適さに関して妥協する気のない貴婦人にも満足できるような豪華な宮殿を独力で建設することがどうしてできたのか、物語自体のコンテクストの中で説明することは不可能であり、クレチアン、ないしは彼の情報源となった作家が、こうした挿話を充分、頭の中で消化しないままに再話したため、こうした矛盾を孕んだ筋立てになったのだという。¹⁰⁵

さらに彼は、自説を補強するために、第2イコノクラスム期の状況が物語に反映された事例として、死を偽装した皇后フェニスに加えられた鞭打ちや煮えたぎる鉛の掌への注入といった一連の拷問が、ラザロスという名のイコン画家修道士に加えられた仕打ちに類似していたこと、¹⁰⁶ また、アモリオンをアラブ軍に占領されたという報に接したテオフィロス帝が心労のあまり重病に陥り、死に至った、という状況が前述のアリスの死を思わせることを指摘している。

2番目の事例については、カーンがマヌエル1世の死について同じようなことを言っていたことは先にも言及した通りであり、史料を探せば似たような話はさらに出てくることも予想される。

なお、セツテガストは、優秀な建築家であるだけでなく画家、彫刻家としても才能を発揮している物語のジャンと、強硬な反イコン派だった総主教の間で折り合いをつけることに苦心しているが、A.カトラーによれば、後者はイコン画家としての前歴を有しており、¹⁰⁷ その点でも両者に接点を見出すことは可能であろう。

以上に見てきたように、セツテガストの議論はそれ自体興味深く、十分に検証されるだけの価値を有しているのは間違いない。しかし、筆者自身は、『クリジェス』成立にもっと近い時代にジャンのモデルを探すことはできないものかと考えている。当初、筆者が漠然と感じていたのは、コンスタンティノープルの宮廷で隠然たる権勢を振るっていた宦官たちのイメージがジャンに投影されているのではないか、という思いである。というのも不自由身分に属して主人に忠節を尽くす一方で、何やら謎めいた雰囲気を放つジャンの姿には、皇帝の腹心として暗躍する数々の有

力な宮廷宦官たちのイメージが容易に重なり合うかのように思われたからである。¹⁰⁸

だが、『クリジェス』のテキストを読み返してみると、こうした見解はそのままの形では受け入れ難いことが判明した。というのも、そこには繰り返してジャンに妻子がいたことが述べられていたからである (v.5489,5529)。

そこで改めて、宦官ではないものの不自由身分出身で、若い皇帝の強力な支持者であり、さらにヨハネスという名を帯びた人物を、12世紀のビザンツ史上に探してみると、一人の人物が浮上してくる。それは、ヨハネス2世治下、同帝の片腕として事実上の宰相役を務めたメガス・ドメスティコスのヨハネス・アクスークである。¹⁰⁹ 彼はトルコ人戦争捕虜の出自であったが、幼少の頃からのヨハネス2世の親友として後者の下で国政を指導し、同帝没後にはマヌエル1世の権力掌握に協力して首都にいたマヌエルの兄イサキオスの身柄拘束に貢献した人物である。¹¹⁰

しかし、生粋の軍人として無骨なイメージが漂うヨハネス・アクスークと、秘密の塔で怪しげな作業にいそむジャンとではイメージの落差が大きすぎる、という反論は当然、ありうるであろう。こうした意見に対しては、ヨハネス・アクスークの身边にも、秘密の隠れ家、絵画に囲まれた部屋、妖術の修練、といった物語のモチーフと重なり合う記事が実際に発見できることがひとつの反証になるかもしれない。

ただし、ここで話題に上っているのは、ヨハネスその人ではなく、彼の息子のアレクシオス・アクスークである。史家ヨハネス・キンナモスが伝えるところによれば、彼は密かにセルジューク朝スルタン、キリジ・アルスランと誼を通じて、首都郊外の別邸の壁面をスルタンの軍事的功業を主題とする壁画で飾ったという。¹¹¹ さらに彼は、しきりに魔術に長けた男を招いては、皇帝に後継者が生まれぬよう策謀を巡らし、そうした目的のためにこの魔法使いから多くの薬を受け取った、とも報じられている。¹¹²

しかし、ここまで展開してきた推論はここで大きな障害に突き当たる。マヌエル帝を陥れるためアレクシオス・アクスークが招いた魔法使いの男は、キンナモスによれば、「ラテン系の出自」(άνδρα Λατινον…γένος) だったというのである。魔法や妖術の使い手はビザンツ人の専売特許ではなかった、ということであろうが、西欧人もビザンツ人も、お互いに胡散臭い要素は相手に押し付けようとする風潮があったことがここからは読み取ることができるだろう。

ちなみに、マヌエル1世治下のビザンツ人の魔法使いに関しては、ニケタス・コニアテスがミカエル・シキディテスなる人物に関して次のような話を伝えている。¹¹³

彼は周りの人々の視界を真っ暗にさせたり、魔物の一団を呼び出してそれらを人にけしかけて見物人を面白がらせたりするなど、悪ふざけに類する魔術を得意としていた。

ある日、彼は仲間たちと共に皇帝宮殿の高見から、海面に陶器を積んだ小舟が通るのを眺めていた。彼が舟の漕ぎ手に術をかけると、後者はたちまち正気を失って立ち上がり、手に持った櫂で船荷の陶器を滅茶苦茶に打ち壊してしまう。正気に戻った後で何が起きたのか尋ねられた水夫は、真っ赤な巨大な蛇が船荷の上をうずくまり、彼を飲み込もうと凝視しているのに気付いたので必死に櫂で叩いたのだが、陶器が粉々になったときには蛇は姿を消していたのだと返答したという。

またあるときには、浴場で入浴中の客たちがパニック状態になって奥の部屋から駆け出してくる、という事件が起きた。集まってきた人々に彼らが口々に語るところによれば、浴槽の中から真っ黒な男たちが躍り出てきて彼らの尻を蹴り上げ、彼らを部屋の外に追い出した、というのである。実は彼らは、この出来事の前に浴場を訪れていたシキディテスと口論を起こしており、こうした仕打ちは後者の意趣返しだったようである。

このような悪さを重ねたために、ついにはシキディテスは摘眼刑に処せられたと言われている。

こうしたとりとめのない風説めいた話を長々と紹介したのは理由がある。A.カジュダンによれば、コニアテスの語る妖術使いのシキディテスは、12世紀後半の文人ミカエル・グリユカスと同一人物だった可能性があるという。¹¹⁴ ミカエル・グリユカスとは、セツテガストによれば「クリジュス」の名の由来となり、ゾナラスに依拠した年代記を残している、あのグリユカスのことである。¹¹⁵ これは単なる偶然なのか、それともそこに偶然以上のものを認めるべきであろうか。それに対して断定的な答えを出すことは現時点では極めて困難と言わざるを得ない。

(3) 女たちの支配

西欧側の記述には、ビザンツ人を男らしい活力に欠ける女々しい存在として侮蔑する表現が散見される。男だか女だかわからない宦官が大手を振って歩き回っている宮廷も、廷臣たちの宝石をちりばめた長たらしい絹の装束も、彼らにとっては唾棄すべきものだった。たとえば、時は下るが1196年のクリスマスに、宝石で飾り立てた派手な衣装で登場したアレクシオス3世アングロス帝（在位1195-1203）に対して、ドイツ皇帝ハインリヒ6世の使節が「今や女のような衣装やブローチを脱ぎ、黄金の代わりに鉄を身にまとう時である」と言い放ったというエピソードは広く知られている。¹¹⁶

ビザンツでは女々しくイジイジした男たちよりも、むしろ女たちの方が活力にあふれ、大きな力を発揮する社会だった、と西欧人が考えていたふしがある。

K.シガールは前述の論文¹¹⁷において、死を装った皇妃フェニスにサレルノの医師たちが拷問まがいの検査を行い、最後に彼女を火炙りにしようとした瞬間、何千という女性が広間に乱入して医師を窓から放り出して墜落死させ、フェニスを救出した、という挿話に注目し、それをミカエル5世による女帝ゾエ追放の報に接した帝都の女たちの憤慨と蜂起の状況を伝えるプセルロスの記述¹¹⁸と対比させている。

シガールは、クレチアンの執筆した時代に至るまで、西欧ではこの種の女たちの革命は確認できないこと、そして、多少の誇張はあるにせよ、数千もの女たちが集結して蜂起できるような都市はコンスタンティノープルの他にありえなかったこと、を根拠に、これら2つの記事を結び付けているのである。

同様に、同じ作者の『獅子の騎士』の中で語られている、「最悪の冒険の城」に囚われて絹織物と金襴刺繍の作業に従事させられている300人の女性たちの姿¹¹⁹が、シガールの言うように、1147年にシチリア王ロジェール2世によってテーベやコリントスから誘拐され、パレルモ王宮付

属の作業場で強制的に働かされていた絹織物職人たちの悲惨な状況を反映するものだったとしたら、¹²⁰ 実際には男女の職工が連行されたはずなのに、女たちの存在しか言及しないことで、手工業生産の分野でも女が主導権を握るビザンツ社会の状況を強調しようという作者の作為を感じ取ることができるのかもしれない。

いずれにせよ、『マビノビオン』に登場する魔法使いの女帝に象徴されるように、西欧人にとって、ビザンツ帝国は、彼らの伝統的なオリエント観念に従えば、女性的な力が支配する世界であった。オリエントは、アシュタルテ、イシス、ウェヌス、サロメ、クレオパトラといった一連の女神や女性の系譜に象徴されるように、豊饒、享樂的な物質生活、性的放縱さ、などに特徴付けられた世界であり、そこに理性と武勇に秀でた西方の男性が登場し、美しく性的魅力に溢れた東方の貴婦人を征服して、世界に秩序をもたらす、というのが古代以来、連綿として西欧で書き継がれてきた文学の主題だったのである。

そうした視角から眺めてみると、クレチアンの『クリジェス』は、一見、こうした規範から逸脱している作品のような印象を受ける。ここで話題に上っているのは親子2世代にわたって、いずれも東方人の男（厳密に言えばクリジェスはハーフだが）と西方出身の女という組み合わせなのである。

だが、我々は、こうした組み合わせに作者の周到な仕掛けが施されていてことを看取しなければならない。2組のカップルにおいて、主導権を握っているのは常に女の方であった。

ソルダモールとアレクサンドルは、相思相愛の関係になった後も、長い間、お互いに思いを打ち明けられないままであった。フラピエの表現を借りれば、「彼女には誇りと節度があるし、彼には度胸がなかったのである。」¹²¹ 先に行動を起こしたのはソルダモールの方だった。「渴望する相手は一言も口にしないから、待ちかねた彼女は思いきって恋人と呼んで接近する。」¹²²

フェニスとクリジェスでは力関係はさらに明確となる。アルベール・ポフィレの舌鋒は容赦がない。「クリジェスという人物には、かなり月並みなものしかない。圧倒的な美貌、お飾りの武勇、そして愛においてさえ、言葉遣いのある種のエレガンスと、それなくしては当時の物語の主人公とはなれない、あの忠実さがあるのみ。」そして彼はこう断言する。「要するに、この物語に意味を与えるのはクリジェスではない。」では、物語に重要な意味を与えているのは誰か。ポフィレは答える。「それはフェニスなのだ。彼女が主役を演じていると言っても過言ではあるまい。事実すべては彼女次第であり、クレチアンがこの人物を構想したやり方こそが、この問題全体の鍵なのである。」¹²³

フェニスは意志の人である。二人でアーサー王の宮廷へ駆け落ちしようというクリジェスの提案を彼女はきっぱりと退ける。彼女は真の愛を貫く一方で、決して自己の名誉が傷つかぬ手段を見つけなければならなかった。「フェニスは外からの強制と戦い、自らの人生の主導権を握ろうと考える。愛と意志の自立性の中に、幸福の条件を作り出そうというのである。この点で彼女の行動は、社会的・宗教的な掟の枠外に立てられた宮廷風倫理と結び付いたものだった。」¹²⁴

西欧出身の皇妃の尻に敷かれたビザンツ皇帝という構図は、相次いで西欧世界から妃を迎えたマヌエル1世の夫婦生活を茶化したものと理解できるかもしれない。

だが、こうした筋立てに作者クレチアンが込めたメッセージは、もっと深いものがあつたようだ。先に紹介した「学問と騎士道の西遷」という主題を思い出してほしい。かつてそうした美德が栄えたギリシアの地は、今や過去の栄光を失い、それらの中心はフランスへと移っていた。ドイツの研究者I.ザイデルはこう語る。「フェニスは高い身分に相応しく、自らの品行を「世間中」の模範にせしめる義務を負っていると考えており、そうした主張は、彼女が、クリジェスというたとえ幾つかの点では称賛すべきものを備えているとはいえ、道徳的には劣位にあることが疑問の余地のない文化圏出身の若者に、最初に理解させなければならないことであつた。」¹²⁵

文化の中心たる西欧の地からコンスタンティノーブルにやってきた彼女たちは、いわば文明の宣教師として、遅れたビザンツの君主とその臣民たちを教化し、彼らを正しい道に導いてやる使命を帯びていたのである。ザイデルが言うように、この物語においては、ビザンツ世界に対する西欧社会の倫理的な優越性が声高に宣揚されているのであり、そこから、東方世界に対して西欧が政治的に指導的な役割を果たすのは当然である、という主張が導き出されるまでには、ほんの一步の距離しかなかったであろう。

物語はここで終わってもよかつたかもしれない。しかし、クレチアンは最後の最大のどんでん返しをエピローグに用意していた。該当箇所を渡邊浩司氏の散文訳で引用してみよう。

「それ以降、事実、妻が自分を裏切るのではないかと、妻を恐れない皇帝はいなかつた。なぜなら、フェニスがどのようにアリスを欺いたか聞き知っていたからである。まずは魔法の水薬を飲ませ、次には他の奸計によって。そういう次第で、コンスタンティノーブルでは皇后は、どんなに気高く、どんなに高貴であろうとも、囚人のように閉じ込められたのである。皇帝は、フェニスのことを覚えている限り、決して皇后のことを信じられないのである。皇帝は皇后を常に部屋に閉じ込めておくが、それは日焼け防止のためというより、不信感のためである。子供の時に去勢した者でない限り、男は決して皇后に近づかなかつた。そうすれば、愛の神が彼らの縁をつなぎ止めておくのに、過ちも恐れないのである。ここでクレチアンの作品は終わる。」

(vv.6749-6768) ¹²⁶

渡邊氏によれば、このエピローグには2つの仕掛けが用意されていた。¹²⁷

ひとつは、ここまで語られてきたクリジェスの物語と、現在、作者のクレチアンが立つ場所との間には何代にも渡る皇帝たちの治世が介在したことを告げることで、読者や聴衆たちに一足飛びに多くの世代の経過を感じさせていることである。それまで、物語の内容を聞きながら、漠然とそこに同時代の国際政治のアナロジーを感じ取っていた聴衆は、ここにおいて、物語がはるか昔の出来事であると聞かされ、同時代の国際情勢とは何の関係もない話であることを知るのである。こうした手法をクレチアンが用いたのは、物語のモデルとして取り沙汰されたであろう有力な王侯貴族たち（特にザクセン大公）との無益なトラブルを回避しようとする配慮が働いた結果であることは容易に想像がつく。

第2の仕掛けは、ここまで、フェニスの能動的な生き方、社会的・宗教的な規範よりも自らの信奉する宮廷風恋愛思想に忠実に行動する彼女の生き方を熱っぽく語ってきた作者が、最後の最

後で身を翻してそれに否定的な態度を示していることである。それまで彼女の生き方を作者は肯定しているのだと思い込んで読み進んできた読者は困惑したに違いない。だが、ここにもクレチアンの周到な計算があったのである。

フェニスの自己中心的な考え方や行動、男を自己の意志に従わせる高圧的な態度などは、クレチアンの物語の読者、聴衆のうち、男性たちには必ずしも受けがよくなかったことは十分に予想されることである。チャールズ・グリムは、フェニスの描き方に、宮廷風恋愛倫理を心から信奉していたわけではないクレチアンのシニカルな視線を感じ取っている。

「彼女(＝フェニス)の即物性や狡猾さ、そして安全に罪を犯し、あらゆる非難を免れたいという彼女の欲求はかなり嫌悪を誘うものであり、素晴らしい恋人というより、計算高い女の姿を示している。彼女は、完璧に自覚して熟考の上に姦通を犯すための周到な計画を立てることなど一切せずに、もっと自然にわが身を投げ打ってれば、もっと魅力的になっただろう。自分が完全に安全で免罪であることを保障する方策をクリジェスが見つげ出すまでは彼のものになる気はない、と彼女が彼に言う場面は、恋人の約束というよりも売り買いの取り引きをしているように見える。」¹²⁸

クレチアンは、このような批判の声が上がることを事前に予想していたのだろう。彼は、彼が語る物語は遠い異国の、しかも遠い過去の話なのだとして位置付けることで、それと現実の世界との接点を遮断し、フェニスの生き方が現実の貴婦人たちの生き方の模範になるものではない、と釘を刺しているのである。

そのように考えてゆけば、ここから看取されるクレチアンの立場は、彼と同じ時代にシャンパーニュ宮廷に仕えていたと思われ、有名な恋愛術指南の書を著しているアンドレアス・カペルラーヌス(アンドレ・ル・シャプラン)¹²⁹のそれと基本的に一致しているように思われる。宮廷風恋愛を称揚するものと一般には評されてきた後者の著作は、根本的に女性を蔑視するものであったことをG.デュビーは看破している。

「しかし女性蔑視は、宮廷の貴婦人たちに取るに足りない特権をいくつか、恋する男に一時話す時間を許すか否かの権利や最も愛する男に花の冠をかぶせる権利を与えてやろうという尊大さの中に、より露骨に現れている。身のこなし、坐り方、文章の言い回しといった作法の遵守以外に何も重要なことがない戯れの空間に女性たちの権力を押し込めること、それはその権力を抑制する、押し潰すことであり、男性の頭の中で女性恐怖を和らげることである。空しい事柄に関して彼女たちに委ねる無意味な権威は、男たちを安心させる。」¹³⁰

こうした理解に従えば、『クリジェス』の物語は、女性たちが能動的に事態を展開させ、物事的主导権を握る世界を、現実社会とははるかに時空を隔てた別の世界に封印した物語とも解釈することもできるだろう。貴婦人たちが自分たちの権利と権力を自覚し、思慮の乏しい男たちを思いのままに統御して、自らの意志に基づいて運命を切り開いてゆく世界は、文学的な虚構の世界だけに封じ込めておかなければならなかったのである。

VI 仮想体験物語の余波 ―結びに代えて―

以上で当初、我々が予定していた課題の考察はほぼ終わったと言えるだろう。以下ではやや蛇足ながら、こうした空想と現実がないまぜとなった物語が、それに接した西欧、とりわけ北フランス周辺の王侯たちに及ぼした有形無形の影響について考察を加えることで結びに代えることにしたい。

通説によって『クリジェス』が成立したとされる年代から四半世紀後の1201年末頃に一人のビザンツ皇子が西欧の土を踏んだ。彼の名はアレクシオス・アンゲロス、ビザンツ皇帝イサキオス2世アンゲロス（在位1185-1194）の息子である。彼の境遇は、例によってどこかしらクレチアンの物語と似かよっていた。

彼の父イサキオスは、西欧側の伝承によれば、クリジェスの父アレクサンドルが騎士道の中心地であるアーサー王宮廷を目指したのと同様に、若き日に学芸の都パリで学生生活を送ったことがあった、と伝えられている。¹³¹ しかも彼は、物語のアレクサンドル同様、ラテン・キリスト教世界出身の花嫁を迎えているのである。¹³²

『クリジェス』の筋立てと似かよった挿話はまだ続く。物語の主人公が叔父アリスによって帝位継承予定者の座から排除されて、大叔父アーサー王の宮廷に赴き、支援を要請したのと全く同じように、叔父アレクシオス3世によって皇太子の座を追われたアレクシオス皇子は、西欧の親族を頼ってビザンツを脱出していたのである。

彼の頼るべき相手は大叔父ではなく義兄、1197年5月に彼の姉エイレーネーと結婚していたシュヴァーベン侯フィリップ（フリードリヒ・バルバロッサの息子、ハインリヒ6世の弟）だった。国内政局に忙殺されていたフィリップは、新たな十字軍遠征の総大将に任じられていたモンフェラート侯ボニファチオと協議した上で、集結した十字軍の軍勢にこの皇子への支援を要請した。1203年春、皇子はアドリア海を南下する十字軍の艦隊に合流する。

この十字軍を率いる主要な指導者たちのなかには、かつてクレチアンが作品を発表した北フランスの高位貴族社会に所縁の深い人々の名前が並んでいる。¹³³

たとえば、フランドルとエノーの伯、そして後に初代ラテン皇帝の座に上ることになるボードゥワンの父は、ゴーチエ・ダラスの庇護者だったエノー伯ボードゥワン5世、母は、クレチアンが『聖杯物語』を献じたフランドル伯フィリップ・ダルザスの姉妹だった。

ブロワ伯ルイは、シャンパーニュ伯アンリ1世の甥であり、彼の母親はマリー・ド・シャンパーニュの妹でルイ7世とアリエノール・ダキテーヌの娘のアリックスである。

またサン・ポール伯ユグの妻ヨランド・デノーは、エノー伯ボードゥワン5世の姉妹でフランドル伯ボードゥワンの叔母にあたる、といった具合である。

不当に叔父に奪われた正統な権利を取り戻すために力を貸してほしい、と切々と訴えるビザンツの年若い皇子の声に耳を傾けながら、彼らは妙な既視感覚に襲われていたのではないだろうか。今や「騎士道の中心」の座を誇るフランスの騎士たちにとって、彼らの勇気と正義感を信じて助力

を求める東方の高貴な若者に対して、救いの手を差し伸べるのに何をためらう必要があったらうか。それは正義のための戦いであり、西欧の騎士道の倫理が東方の無節操なリアルポリティークに対して道徳的に優位に立つことを証明すべき崇高な事業でもあったのである。¹³⁴ 悲惨な境遇に陥ったビザンツの皇子を助け、彼に正統な権利を取り戻してやるために自分たちの武器を揮うことは、神と正義を信奉する彼ら西欧騎士たちの当然の責務なのであり、そこに何らかの欲得ずくの打算が入り込む余地など表面的にはなかったのである。

もちろん、そうは言っても、アレクシオス皇子が協力の見返りに約束していた莫大な報酬に彼らが全く心を動かさなかった、と言えは嘘になるだろう。物語のアレクサンドルのように、そして今も記憶に残るマヌエル1世帝のように、ビザンツ皇帝は惜しみなく金品財貨を分かち与えるものであり、彼らの高邁な事業が達成された暁に、自発的にアレクシオス皇子から差し出されるであろう魅力的な贈物を拒む理由は彼らにはなかった。

M. アンゴールドは、『クリジェス』の結末近くで、アリスが没し、クリジェスにコンスタンティノーブルの皇帝の座に就く道が拓かれたことを告げる使者が、東方への遠征のため大軍が集結中のアーサー王の陣中に到着したとき、一部の人々はこの知らせを歓迎したが、他の人々は遠征計画を続行させ、ギリシアに向かって出立することを望んだ、という記述 (vv. 6718-6722) を引きながら、そこではフィクションが史実に先行していた、と断じている。¹³⁵

虚構を追いかけるようにして、ヴェネツィア人の艦隊に運ばれた西欧騎士たちの軍勢が、すったもんだの末に、コンスタンティノーブル市街の広大な地域を焼失させた上で都を占領し、ラテン帝国と称するひ弱な国家を打ち立てるのは、この後、1204年4月のことである。

註

- 1 筆者が主に参照した校訂版は、Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Édition publiée sous la direction de D. Poirion avec la collaboration d'A. Berthelot, P.F. Dembowski, S. Lefèvre, K.D. Utti et Ph. Walter, Bibliothèque de la Pléiade, 1994 である。本文中で表示するテキストの行数は、本校訂版に基づいている。この他に、*Les romans de Chrétien de Troyes, II: Cligès*, éd. A. Micha, Paris, 1954; Chrétien de Troyes, *Cligès*, ed. S. Gregory and Cl. Luttrell, Cambridge, 1993; Chrétien de Troyes, *Cligès*, Translated by B. Raffel, New Heaven, 1997 を必要に応じて参照した。
- 2 cf. 青山吉信『アーサー伝説—歴史とロマンスの交錯—』岩波書店、1985年、254-258頁
- 3 後で見るように、『クリジェス』の成立年代として今日、定説となっている1176年頃という年代も、こうした一連の同時代国際政治史との連関の中から導き出された数字である。
- 4 cf. 渡邊浩司『クレチアン・ド・トロワ研究序説—修辞学的研究から神話学的研究へ—』中央大学出版部、2002年、特に10-18頁。
- 5 ジョルジュ・デュビー（新倉俊一・松村剛訳）『十二世紀の女性たち』白水社、2003年、391頁。
- 6 ビザンツとノルマン・シチリア王国間の敵対関係については、さしあたり、H. Wieruszowski, "The Norman Kingdom of Sicily and the Crusades", in K.M. Setton ed., *A History of Crusades*, vol. II, Madison, 1969, pp. 5-42, esp. pp. 3-5, 10-16, 36f を参照。アンティオキア公ボエモン（ロベール・ギスカールの息子）が1107年に対ビザンツ遠征に乗り出すに先立って西欧で行なったプロパガンダ活動については、R.B. Yewdale, *Bohemond I, Prince of Antioch*, Princeton, 1924 (rep. New York 1980), pp. 106-114 を参照のこと。
- 7 十字軍行軍中のトラブルが、西欧側のビザンツに対する不信感を増幅させたことについては、さしあたり、S. Kindlimann, *Die Eroberung von Konstantinopel als politische Forderung des Westens im Hochmittelalter. Studien zur Entwicklung der Idee eines lateinischen Kaiserreichs in Byzanz*, Zürich, 1969, S. 57-

- 68,149-168,205-217 を参照。
- 8 彼の生涯に関しては、さしあたり、ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』朝日出版社、1988年、12-81頁、菊池淑子『クレティアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994年、185-200頁等を参照。
- 9 神沢栄三「物語の発生と展開」、福井芳男他編『フランス文学講座1—小説1』、大修館、1976年、22頁
- 10 ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』13頁
- 11 たとえば、1173年の文書の登場するトロワの聖ルー修道院参事会員クリスチアヌスなど。cf. Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, 1994, pp. xi-xii.
- 12 彼を改宗ユダヤ人と推定する根拠は、①その洗礼名がしばしば改宗ユダヤ人に付与されていること ②トロワには重要なユダヤ人共同体があったこと ③彼の『聖杯物語』は、古いモーセの律法が新しいキリスト教の教えに取って代わられること、すなわち、ユダヤ人の改宗を表す物語として解釈できること、である。cf. ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』246頁。これらの論拠はいずれも状況証拠の域を出ていないように思われる。
- 13 新倉俊一他編『フランス中世文学集2—愛と剣と—』白水社1991年、401-402頁。
- 14 Chrétien de Troyes, *Cligès*, Translated by B. Raffel, p. 215f. K.N. Ciggar., *Western Travellers to Constantinople. The West and Byzantium, 962-1204: Cultural and Political Relations*, Leiden, 1996, p. 238
- 15 以下の記述は、主として Chrétien de Troyes, *Cligès*, ed. S. Gregory and Cl. Luttrell, pp. vii-xxvii に拠る。
- 16 8篇のうち6篇がパリの国立図書館所蔵、残り2篇はトゥール市立図書館とトリノ国立図書館に所蔵されている。このうちトゥール写本には、冒頭と巻末にかなりの欠損がある。
- 17 cf. M. Roque, "Le manuscrit B.N.fr. 794 et le scribe Guiot", *Romania*, 73, 1952, p. 178
- 18 *Digenis Akritas: The Grottaferrata and Escorial Versions*, edited and translated by E. Jeffreys, Cambridge, 1998 渡辺金一「ビザンツ文学—英雄詩『ディゲニス・アクリタス』—」『プラティア』2号。1983年、1-8頁、同3号、1984年、1-7頁
- 19 ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』137頁
- 20 'sororee d'amors'(v.978)「愛で飾られた」の意（渡邊浩司『クレチャン・ド・トロワ研究序説』121頁）フラピエは「恋する金髪娘」という訳を付している（ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』137頁）
- 21 顧問たちは、ポリネクスとエティオクレスの故事（1155年頃成立した『テーベ物語』の登場人物。クレチャンがこの作品を知っていたことがこの箇所から確認される）を引き合いに出して、兄弟同士が殺し合い、国土を荒廃させることは回避すべきだとアリスに勧告したという。
- 22 クレチャンは、このことによって、フェニスとアリスの間には正式な婚姻関係は成立しなかった、と考えているようである。それゆえ、その後でフェニスとクリジェスが結ばれたとき、それはトリスタンとイゾーのような姦通愛ではなく、合法的な婚姻が成立するのである。
- 23 天沢退二郎「解説 クレチャン・ド・トロワ」、新倉俊一他編『フランス中世文学集2—愛と剣と—』所収、白水社1991年、401-405頁。引用箇所は403頁。
- 24 ジョルジュ・デュビー（新倉俊一・松村剛訳）『十二世紀の女性たち』111-125頁、特に123-124頁。
- 25 cf. 渡邊浩司『クレチャン・ド・トロワ研究序説』125-126頁。
- 26 トリスタン説話との関連については、さしあたり、神沢栄三「Chrétien de Troyesにおけるトリスタン神話—Cligèsについて—」、『名古屋大学文学部研究論集』73号、1978年、163-185頁、およびアルペール・ボフィレ（新倉俊一訳）『中世の遺贈—フランス中世文学への招待—』筑摩書房、1994年、187-196頁を参照。
- 27 F. Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", *Zeitschrift für romanische Philologie*, 32, 1908, S. 400-422
- 28 セッテガストによれば、彼らの名前がイサキオスからアレクサンドルに改められたのは、極めてユダヤ臭の強いイサキオス（イサク）という名が忌避され、いかにもギリシア的で、しかも弟のアレクシオス（アリス）と音の近いアレクサンドル（アレクサンドロス）がこれに代えて選ばれた結果であるという。
- 29 Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B. Leib et P. Gautier, 4 vols, Paris, 1937-1976, vol. I, p. 135; F. Dölger und P. Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches*, vol. 2. 2A. München, 1995, no. 1068, 1077

- 30 セツテガストが語るによれば、ハインリヒは軍事行動を起こすため、ビザンツ側からの資金援助を当てにしており、そのために先に結ばれた婚約を破棄する気などなかったにもかかわらず、交渉を長引かせてビザンツ側に気を持たせるような素振り続けたのだという。
- 31 cf. J.-C. Cheynet, *Pouvoirs et contestations à Byzance (963-1210)*, Paris, 1990, pp.96f, 368; B. Skoulatos, *Les personages byzantins de l'Alexiade. Analyse prosopographique et synthèse*, Louvain, 1980, no.87, pp.135-138.
- 32 Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B. Leib et P. Gautier, vol. II, p.213f.
- 33 cf. Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renaud, 2éd., Paris, 1967, 2vols, vol. I, pp.44-52
- 34 F. Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.408-416. グリュカスをめぐる議論はこの後にもう一度取り上げる予定。
- 35 A. Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", *Bulletin bibliographique de la Société internationale arthurienne*, 2, 1950, pp.69-88; Id., *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, Paris, 1960, pp.160-178.
- 36 フーリエによれば、襲撃の場が南ドイツのレーゲンスブルグ近郊に設定されているのは、ときのザクセン大公ハインリヒ獅子公がバイエルン大公をも兼任していたという史実を反映しているのだという。 cf. A. Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", p.75.
- 37 *ibid.*, p.76.
- 38 フーリエは、バルバロッサがレーゲンスブルグやマインツ、アーヘンなどには頻繁に訪れていたのに対し、ケルン訪問は稀だったこと（38年間の治世中、5度のみ。その最後がこの1171年の事例）を指摘し、『クリジェス』の中で、ことさらにケルンが皇帝の滞在地となっている点に注目している。
- 39 A. Fourrier, "Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes", pp.78-80; Id., *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, pp.170-175. ちなみに、M. Halperine, "Duke of Saxony and the Date *ad quem* of *Cligès*", *The Romanic Review*, 21, 1930, pp.231-241 は、やはりザクセン大公が敵役として登場することに注目しているが、そのことから、『クリジェス』成立をむしろ、ハインリヒ獅子公がシャンパーニュ伯妃マリーの異父妹（アリエノール・ダキテーヌと英王ヘンリー2世の娘）マチルドが結婚した1168年よりも前に想定している。
- 40 フーリエによれば、フィリップがボーヴェー司教に就任したのは、前任者の司教の死（1175年5月17日）と、彼のためにこの人事に尽力した彼の叔父でランス大司教のアンリの死（同年11月13日）の間のこととされる。
- 41 フィリップの父とシャンパーニュ伯アンリ1世は良好な関係にあり、またフィリップ自身、アンリの友人であり、後者が1179年、十字軍に参加した際には彼に同行している。
- 42 A. Fourrier, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, p.173
- 43 J. Misrahi, "More Light on the Chronology of Chrétien de Troyes?", *Bulletin bibliographique de la Société internationale arthurienne*, 11, 1959, pp.89-120, esp. pp.101-109.
- 44 実を言えば、この場合、ビザンツ皇帝と結婚したドイツ皇女と、ザクセン大公の妻はもちろん同一人物ではない。ザクセン大公ハインリヒ倣岸公の妻はコンラートの1代前の皇帝ロータル3世の娘だった。
- 45 J. Misrahi, "More Light on the Chronology of Chrétien de Troyes?", p.109.
- 46 H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de *Cligès*", *Romania*, 82, 1962, pp.113-121
- 47 第一の点に関して言えば、カーンは触れていないが、マヌエル帝とスルタンが外交書簡の中で互いに皇帝を「父」、スルタンを「息子」として呼びかけあった、という事実があったことが顧慮されるべきかもしれない。 cf. Niketas Choniates, *Historia*, ed. J.-L. van Dieten, Berlin, 1975, p.123.
- 48 これ以外にも、スルタンの母親は、ロシア君侯とドイツ人女性の間生まれた娘だった、という噂もあったらしい。 I. Seidel, *Byzanz im Spiegel der literarischen Entwicklung Frankreichs im 12. Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1977, S.154, Anm.10. カール・ヨルダン（瀬原義生訳）『ザクセン大公ハインリヒ獅子公—中世北ドイツの覇者—』ミネルヴァ書房、2004年、209頁にも、スルタンは「高貴なドイツ婦人を母親にしていた」という記述がある。
- 49 H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de *Cligès*", p.118.
- 50 さしあたり、拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年、261頁を参照のこと。
- 51 H. et R. Kahne, "L'énigme du nom de *Cligès*", p.121, n.1.
- 52 E. v. Ivanka, "Fragen eines Byzantinisten an Germanisten und Romanisten (*Wolfdietrich* und

- Cligès*”), *Germanisch-Romanische Monatsschrift*, N.S. 22, 1972, S. 433-435.
- 53 F.Dölger und P Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches*, vol.2.2Aufl.München, 1995,Nr.1458; Niketas Choniates, *Historia*, ed.J-L.van Dieten,Berlin,1975,p.137. これによってマヌエル帝は、ビザンツとハンガリーの同君連合、もしくはビザンツによるハンガリーの吸収合併を目論んでいたと言われている。cf.Gy.Moravcsik, *Byzantium and the Magyars*, Amsterdam,1970,p.89f; D.Obolensky, *The Byzantine Commonwealth. Eastern Europe,500-1453*, London,1974 (rep.New Heaven 1982),p.214f; F. Makk, *The Arpáds and the Comneni: Political Relations between Hungary and Byzantium in the 12th Century*, Budapest,1989,pp.86-88,96-98..
- 54 D.M.Maddox,“Critical Trends and Recent Work on the *Cligè* of Chrétien de Troyes ”,*Neuphilologische Mitteilungen*, 74,1973,pp.730-745,esp.740f.
- 55 以下の記述は、特に事実関係のそれに関して、特別な注記がないかぎり、基本的に A.Fourrier,“Encore la chronologie des œuvre de Chrétien de Troyes”,pp.69-88; Id.,*Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t.I, ,pp.160-178 の記述に負っている、
- 56 cf.青山吉信『グラストンベリ修道院—歴史と伝説—』山川出版社、1992年、55-56頁。
- 57 伯の大叔父、シャンパーニュ伯ユーグ1世の妻エリザベス（ブルゴーニュとマコンの伯エチエンヌ1世の娘）は、皇后ベアトリクス叔母（皇后の父、ブルゴーニュ伯ルノー3世の姉妹）だった。
- 58 同公家は、バルバロッサが擁立した対立教皇ヴィクトル4世とも縁戚関係にあった。
- 59 cf.K.N.Ciggaar ,*Western Travellers to Constantinople. The West and Byzantium, 962- 1204: Cultural and Political Relations*, Leiden,1996,pp.183-188.
- 60 J.A.Brundage, “An Errant Crusader: Stephen of Blois”, *Traditio*, 16, 1960, pp.380-395, esp. p.384f; J. Shepard, “‘Father’ or ‘Scorpion’? Style and Substance in Alexios’s Diplomacy”, in M. Mullett and D. Smythe, *Alexios I Komnenos*, I,Belfast, 1996,pp.68-132,esp.pp.80-82. スティーヴン・ランシマン（和田廣訳）『十字軍の歴史』河出書房新社、1989年、158頁。アレクシオス帝国が第1回十字軍に参加した西欧の王侯と結んだ法的関係全般に関しては、F.L.Ganshof,“Recherche sur le lien juridique qui unissait les chefs de la première Croisade à l’empereur byzantin”,dans *Mélanges offert à Paul- Edmond Martin*, Geneve,1961,pp.44-63 を参照（養子縁組については p.57f）。
- 61 シガールは、‘gout byzantin’ という用語を用いている。K.N.Ciggaar ,*Western Travellers to Constantinople*, p.184.
- 62 また彼がウィンチェスター聖堂に寄贈した飾りメダル模様の豪華な絹の掛け布も、シガールの推測するところによれば、ビザンツからの到来物であった。 *ibid.*, pp.155-157.
- 63 *ibid.*, p.165; F.Chalandon,*Jean II Comnène et Manuel I Comnène* ,*Les Comnène*, II,Paris,1912 (rep. New York 1972)p.552.
- 64 井上浩一「アンドロニコス1世とコンスタンティノーブル市民闘争」、『人文研究』（大阪市立大学）30巻4号、1978年、48-99頁、特に58-84頁、同『ビザンツ皇妃列伝—憧れの都に咲いた花—』筑摩書房、1996年、191-216頁。Ch.M.Brand,*Byzantium Confronts the West 1180-1204*, Cambridge Mass., 1968, pp. 31 -75 ; O. Jurewicz,*Andronikos I Komnenos*, Amsterdam,1970 ,S.84-96.
- 65 Walter Map,*De nugis curialium*, ed.,M.R.James,C.N.L.Brook & R.A.B. Mynors,Oxford,1983, pp.174 -179; cf.M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, Harlow,2003,p.61, .
- 66 ことによるとマップは、アンドロニコスを、マヌエルのすでに逝去していた同名の兄（ヨハネス2世の次男）と混同していたのかもしれない。
- 67 Ch.M.Brand, *Byzantium Confronts the West*, p. 174 ; K.N.Ciggaar ,*Western Travellers to Constantinople*, p.167; W.Hecht,*Die byzantinische Aussenpolitik zur Zeit der letzten Komnenenkaiser (1180-1185)*, Neustadt,1967,S.70-71.
- 68 『マルケ・ド・ローム』は、クレチアンの物語同様、クリジェスという名のギリシア皇帝の甥と皇后との禁断の恋をめぐる短い物語である。しかし、テッセラの妙薬の挿話は含まれておらず、また、「偽りの死」を工作する以前に恋人たちの不義が成立しているなど、筋書きの一部に異同が見られるため、フラピエは、時代的に先行する『クリジェス』を種本にして『マルケ』が書かれた、とは考えず、2つの作品に共通する情報源が存在した、と想定しているのである。cf. ジャン・フラピエ（松村剛訳）『アーサー王物語とクレ

チャン・ド・トロワ』141-142頁。

- 69 Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, p.1116f.
- 70 神沢栄三「物語の発生と展開」、福井芳男他編『フランス文学講座1-小説1』、15-19頁。
- 71 アレクサンドルの12人の僚友たちのうち、Cornix と Torin le Fort はいずれも、1047年の大反乱の首謀者レオン・トルニキオス、Nebunal de Micenes と Charquedon devers Aufrique はいずれも11世紀半ばにシチリアでビザンツ軍と戦ったムスリムの将軍の名（前者はメッシナの守備長官 Abulaphar、後者は北アフリカの軍勢を率いていたカルケドニオス〔本名 Omar〕）、Acoridomés d'Athens は1059年にシラクサでビザンツ軍と戦って戦死した背教者アルカディウス、Acorde l'Estout は総主教コンスタンティノス・レイクデス、Ferolin de Salonique はアレクシオス1世の義兄ニケフォロス・メリッセノス、に同定されている。cf. F.Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.404-408. ただし、こうした解釈には異論もある。ヴァルテルによれば、これらのギリシア風の名前の大半は実際にはギリシアに由来するものではなく、先行する文学作品から着想を得たものであった。たとえば、Cornix はワースの『ブリュ物語』に登場するトロイア人 Corineus を想起させるし、Nebunal de Micenes はアーサー王物語に言及される Nabon (ないし Mabon) と考えられる。Charquedon devers Aufrique は、calcédone 「紅玉髓」の意味だという。またセッテガストが論及していない Pinabel は『ローランの歌』の登場人物(ガズロン)の親族)、Neruis は叙事詩に頻出する Hervis という名の頭文字を置き換えた形、といった具合である。cf. Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, p.1039. なお、第2聖像論争期の逸話については後述。
- 72 F.Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.415.
- 73 K.N.Ciggaar, "Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine > : la révolution des femmes au palais de Constantinople", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 38, 1995. pp. 267-274.
- 74 シガールによれば、今日、72の写本が現存しているという。
- 75 なお、もしも12世紀にビザンツの歴史叙述が西欧に伝来したとしたら、それはセッテガストの主張するミカエル・グリュカスカ、それともシガールの語るゾナラスの年代記だったのか、という問題についてはいずれにしても解決するのは困難である。ただ、グリュカスカの記述は基本的にゾナラスのそれに依拠していたから、いずれが伝来したにしても内容的には大差がなかったと推察される。
- 76 cf. D.Hamilton, *The Latin Church in the Crusader States*, London, 1980, pp.38-50.
- 77 cf. Gautier d'Arras, *Eracle*, éd., G.R.de Lage, Paris, 1976. ゴーチエはブロワ伯ティボー5世(シャンパーニュ伯アンリ1世の弟)に仕え、『エラクル』をエノー伯ボードゥワン5世とマリー・ド・シャンパーニュに献呈している。
- 78 R.J.Macrides, "Dynastic Marriage and Political Kinship", in J.Shepard and S.Franklin ed., *Byzantine Diplomacy*, Aldershot, 1992, pp.263-280. 拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年、31-33頁を参照。
- 79 クレチアンの記述を字義通りに解釈すれば、フランスに移行したのは「学芸」だけであり、「騎士道」は含まれていなかったようにも受け取れる。また、この後でアレクサンドルが武者修行に赴く先もイングランドのアーサー王宮廷だから厳密に言えばフランスではない、と言えるかもしれない。しかし、以下に述べるように、こうしたアレクサンドルの行動自体、騎士道の本場が西欧に移行したことを前提にしていること、また、当時のアングロ・ノルマン国家の実態を鑑みれば、物語中のアーサー王にフランス騎士道の担い手を見出しても差し支えないように思われること、などから、通説に従って、この箇所は上記のように解釈しておきたい。なお、この部分を字義通り解釈するよう主張する研究としては、M.A.Freeman, "Chrétien's *Cligès*: A Close Reading of the Prologue", *The Romanic Review*, 67, 1976, pp.89-101 がある。
- 80 D.M.Maddox, "Kinship Alliances in the *Cligès* of Chrétien de Troyes", *L'esprit createur*, 12, 1972, pp.3-12
- 81 cf. ジョルジュ・デュビー(篠田勝英訳)『中世の結婚-騎士・女性・司祭-』、新評論、1984年、359-360頁。
- 82 cf. D.M.Maddox, "Kinship Alliances in the *Cligès*", p.7.
- 83 さしあたり、拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年、33-34頁、および L.Jones and H.Maguire,

- “A Description of the Jousts of Manuel I Komnenos”, *Byzantine and Modern Greek Studies*, 26, 2002, pp.104-148 を参照。
- 84 12世紀末のイングランドの歴史家ロジャー・オヴ・ホヴデンは、1185年の皇帝アンドロニコス1世の失脚とイサキオス2世の登位に至る政変劇を報じた際、反乱に立ち上がる前、イサキオスはパリで学生生活を送り、ラテン語と礼儀作法を学んでいた、と報じている。cf. Roger of Hoveden, *Chronica*, ed., W. Stubbes, 2 vols, London, 1868-1871 (rep. Wiesbaden, 1964), vol. II, pp. 204-208. シガールはこの挿話の信憑性について肯定的な態度を示しており、当時、フランス王家とコムネノス一門は縁戚関係にあったから、彼がパリに旅行するのはずっと容易になっていたこと、宮廷内のコネクションを得ようと望む貴族の若者にとって広く旅して回り、今やこれまでになく関係が緊密になった西欧に関する知識を深めようとするのは有益なことだった、と語っているが、当時のビザンツの支配層にはたしてそうした発想があったかどうかはかなり疑問のように感じられる。cf. K.N. Ciggar., *Western Travellers to Constantinople*, p. 166f. なお、イサキオス・アングロス（後の2世）に関して付言しておけば、彼は、帝都でアンドロニコス1世に対する蜂起を主導する以前には、小アジア西部の都市で彼の一族と共に同帝に対する反乱行動に参加していたことが確認できるのである。井上浩一「アンドロニコス1世とビザンツ貴族」、『史林』62巻4号、1979年、131-148頁、特に145-146頁を参照。
- 85 William of Tyre, *Historia rerum in partibus transmarinis gestarum*, ed., R.B.C. Huygens, Thurnhout, 1986, p. 1020.
- 86 リチャード・バーバー（高宮利行訳）『アーサー王—その歴史と伝説—』、東京書籍、1983年、66頁、青山吉信『アーサー伝説—歴史とロマンスの交錯—』岩波書店、1985年、120頁を参照。
- 87 あるいは彼女には *mestre* という肩書きが付されており、Ph. ヴァルテルはそれを *La gouvernante* と訳しているのので、「私教師」と呼ぶほうが妥当かもしれない。
- 88 菊池淑子『クレティアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994年、特に32-35頁、38-40頁、44-54頁を参照。
- 89 Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 1153.
- 90 “Les poisons et les philtres, voilà des éléments typiquement byzantins!”, cf. K.N. Ciggaar, “Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine > : la révolution des femmes au palais de Constantinople”, *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 38, 1995, pp. 267-274, p. 270.
- 91 Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2éd., Paris, 1926-1928 (rep. 1967), 2 vols, vol. I, p. 98.
- 92 プセルロスによれば、彼女はロマノス3世を「最初は薬物でいい気分させ、その後でヘレボロスを混入した」という。 *ibid.*, vol. I, p. 51. なお、ヘレボロスとは、キンボウゲ科の植物の総称で、根には下剤作用があり、古代には狂気の治療薬として用いられたということである。ちなみに、この記事は、シガールによって『クリジェス』の情報源と推定されているゾナラスの年代記の中にも簡略化された形で記載されている。Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum*, III, ed., Th. Büttner-Wobst, Bonn, 1897, p. 584.
- 93 Michael Psellos, vol. I, p. 148; cf. J. Duffy, “Reactions of Two Byzantine Intellectuals to the Theory and Practice of Magic: Michael Psellos and Michael Italikos”, in H. Maguire ed., *Byzantine Magic*, Washington D.C., 1995, pp. 83-97, esp. p. 88f.
- 94 中野節子 訳『マビノギオン—中世ウェールズ幻想物語集—』JULA出版局、2000年、318-319頁、324-328頁。
- 95 コンスタンティノープルをケルト的異境世界と結び付け、同地の女帝を魔術的能力の持ち主と想定する設定は、他にも幾つかの中世文学の中に認められるようだ。こうした主題については現在、調査の途上にあり、詳しくは別稿を期したい。この問題に関しては、さしあたり、ハワード・ロリン・パッチ（黒瀬保・池上忠弘・小田卓爾・迫和子訳）『異界—中世ヨーロッパの夢と幻想—』三省堂、1983年、260頁、282-287頁を参照のこと。
- 96 A. カジュダンと A.M. タルボットによれば、アトス山の修道院所蔵の10-12世紀の文書に登場する人名を数えてみると「ヨハネス」が断然トップの90例で、2位の「ニコラオス」(42例)の倍以上あった。A. Kazhdan and A.M. Talbot, “John”, in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, New York · Oxford, 1991, p. 1042f.
- 97 渡邊浩司『クレティアン・ド・トロワ研究序説』241-242頁。

- ⁹⁸ J.Stiennon, "Histoire de l'art et fiction poétique dans un épisode du *Cligès* de Chrétien de Troyes", *Mélanges Rita Lejeune*, t.I, Gembloux, 1969, pp. 695-708, p.702; Id., *Byzantine Architecture*, London, 1979 (rep.1986), p.14. 邦訳: シリル・マンゴー(飯田喜四郎訳)『ビザンティン建築』、本の友社、1999年、15頁。
- ⁹⁹ F.Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.408-415.
- ¹⁰⁰ ロmanos 3 世失脚とミカエル 4 世登極に至る政変劇については、さしあたり、拙稿「ロmanos 3 世アルギュロスの墜落——11 世紀前半のビザンツ皇帝権と政治体制——」、『史林』、74 巻 2 号、1991 年、106-139 頁、特に 131-133 頁を参照。
- ¹⁰¹ この人物のプロフィールは、M.W.Herlong, *Kinship and Social Mobility in Byzantium, 717-959*, Ph.D. thesis, The Catholic University of America, 1986, pp.114-116 を参照。
- ¹⁰² F.Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.408-409. なお、ブリヤスの離宮については、R. Janin, *Constantinople byzantine : Développement urbain et répertoire topographique*, 2éd., Paris, 1964, p.146f を参照。
- ¹⁰³ Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum*, ed., H.Thurn, Berlin, 1973, p.86.
- ¹⁰⁴ R. Janin, *Constantinople byzantine*, p.468f によれば、ヨハネスの兄弟アルサベルの屋敷地はボスフォラス海峡のヨーロッパ側、今日のオルタキョイ地区にあったようである。
- ¹⁰⁵ F.Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.409-411.
- ¹⁰⁶ ラザロスの場合は、2 度と絵が描けないように掌の内側を熱した鉄棒で刺し貫かれたという。cf. Ioannes Skylitzes, p.60f.
- ¹⁰⁷ A.Cutler, "John VII Gramatikos", in A.Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.1052.
- ¹⁰⁸ ビザンツの宦官に関する最近の研究としては、K.M.Ringrose, *The perfect Servant. Eunuchs and the Social Construction of Gender in Byzantium*, Chicago, 2003; Sh.F.Tougher, "Byzantine Eunuchs: An Overview, with Special Reference to their Creation and Origin", in L.James ed., *Women, Men and Eunuchs. Gender in Byzantium*, London - New York, 1997. 邦語では、和田廣『ビザンツ社会における宦官制度の総合的研究』、平成 10~12 年度科学研究費(基盤研究 C2) 研究成果報告書、2002 年、がある。
- ¹⁰⁹ この人物のプロフィールは、Ch.M.Brand, "The Turkish Element in Byzantium, Eleventh-Twelfth Centuries", *Dumbarton Oaks Papers*, 43, 1989, pp.1-25, esr. pp.4-6 を参照。
- ¹¹⁰ もしもこの場合にマヌエルが物語のクリジェスに対応する存在だとすれば、イサキオスはアリスの役回りを与えられることになる。その場合には彼が主人公の叔父ではなく兄であることが気にかかるが、ことによると、同じ時期に帝位に野心を示していたことが報じられている同名のイサキオス(ヨハネス 2 世の弟、マヌエルの叔父 cf. Ioannes Kinnamos, *Epitome rerum ab Ioanne et Alexio [Manuele] Comnenis gestarum*, Bonn, 1836, p.53f.) と彼を作者が混同した可能性も捨てきれまい。
- ¹¹¹ *ibid*, p.266. キリジ・アルスラン=クリジェスという先のカーンの説を踏襲すれば、マヌエル 1 世=アリス、ジャン=ヨハネス・アクスークの息子アレクシオス、という図式が描けるかもしれないが、やや苦しい感じも否めない。
- ¹¹² *ibid*, p.267f. またしても、マヌエル=アリスと想定すれば、それは、クリジェスの帝位継承を妨げないために生涯結婚しないことを約束したアリスに約定を守らせようとした行為として解釈することもできるかもしれない。
- ¹¹³ Niketas Choniates, p.148f.
- ¹¹⁴ A. Kazhdan, "Holy and Unholy Miracle Workers", in H. Maguire ed., *Byzantine Magic*, Washington D.C., 1995, pp.73-82, p.81, n.16.
- ¹¹⁵ cf. F.Settegast, "Byzantinisch-Gesichichliches im Cliges und Yvain", S.415-416.
- ¹¹⁶ Niketas Choniates, p.477.
- ¹¹⁷ K.N.Ciggaar, "Encore une fois Chrétien de Troyes et la < matière byzantine >", p.268, 270
- ¹¹⁸ Michael Psellos, vol.I, p.102.
- ¹¹⁹ cf. 菊池淑子『クレティアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』、123-135 頁。
- ¹²⁰ K.N.Ciggaar, "Chrétien de Troyes et la < matière byzantine > : les demoiselles de Château de Pesme Aventure", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIe siècles*, 32, 1989, pp.325-331.

- 121 ジャン・フラピエ (松村剛訳) 『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』 137 頁。
- 122 ジョルジュ・デュビー (新倉俊一・松村剛訳) 『十二世紀の女性たち』 120 頁。
- 123 アルベール・ポフィレ (新倉俊一訳) 『中世の遺贈—フランス中世文学への招待—』 筑摩書房、1994 年、188-189 頁。
- 124 ジャン・フラピエ (松村剛訳) 『アーサー王物語とクレチアン・ド・トロワ』 145 頁。
- 125 I.Seidel, *Byzanz im Spiegel der literarischen Entwicklung Frankreichs im 12.Jahrhundert*, Frankfurt am Main, 1977, S.99.
- 126 渡邊浩司 『クレチアン・ド・トロワ研究序説』 126 頁。
- 127 同上、126-127 頁。
- 128 Ch.Grim, "Chrétien de Troyes's Attitude towards Woman", *The Romanic Review*, 16, 1965, pp.236-243, esp.p.239.
- 129 cf. アンドレアス・カペルラーヌス (瀬谷幸男訳) 『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛術指南の書—』 南雲堂、1993 年。
- 130 ジョルジュ・デュビー (新倉俊一・松村剛訳) 『十二世紀の女性たち』 430-431 頁。
- 131 本稿註 84 参照。
- 132 ただし、それは、フランス、ドイツ、イングランドのいずれからでもなく、ハンガリー王国からだったが。また、アレクシオス皇子の母親は、このハンガリー王女ではなく、彼の母親は、イサキオスが死別した最初の結婚相手だったことも付記しておく。cf. Niketas Choniates ,p.419..
- 133 J.Longnon, *Les compagnons de Villehardouin. Recherches sur les croisés de la quatrième croisade*, Genève, 1978, pp.74, 137, 196.
- 134 クレチアンの『クリジェス』に関して、L.ダントン・ダウナーは、「ギリシア」が騎士道や学芸の発祥の地と見なされる一方で、同時にその地は、そこに向かってアーサー王宮廷の騎士道が伝えられ、その文化的優位と権威を立証するための対象となるべき新天地とも見なされていた、と語っている。 L.Dunton-Douner, "The Horror of Culture: East West Incest in Chrétien de Troyes's *Cligès*", *New Literary History*, 28, 1997, pp.367-381, p.373.
- 135 M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, p.68.

[付記] 本稿は平成16年度科学研究費・基盤研究 (C) の研究成果の一部である。なお、本稿の骨子は、第2回日本ビザンツ学会 (金沢大学サテライトプラザ、2004年3月31日) において口頭報告を行う機会を得た。